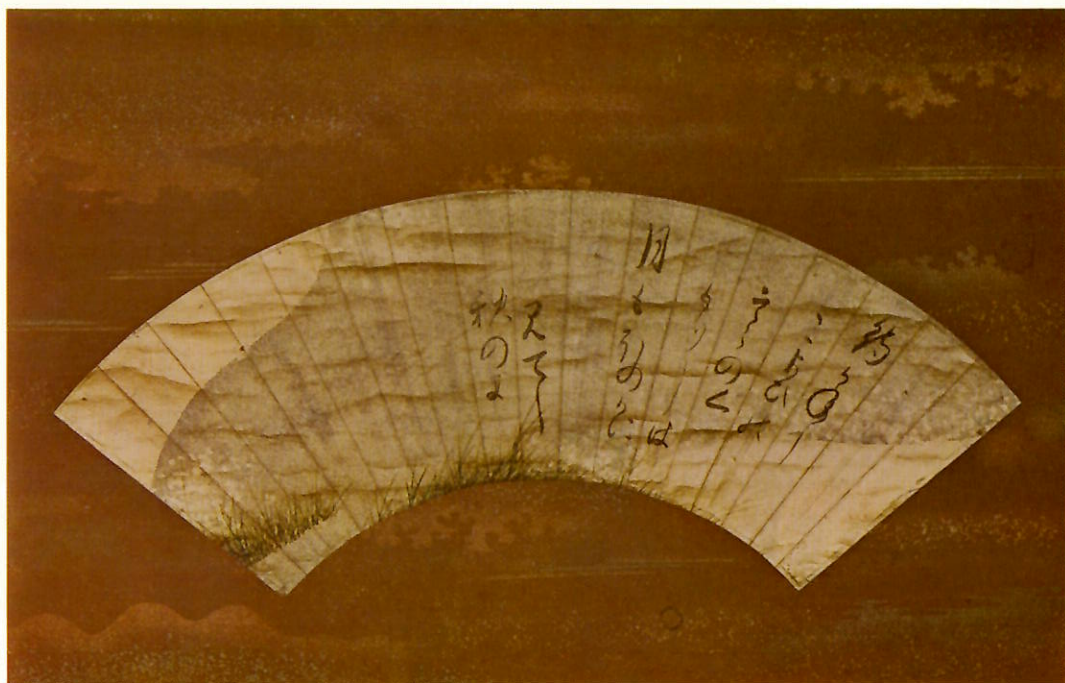




書 159 和歌扇面「待ちかねし云々」

目 次

徳川歴代将軍の「書」に見える「歌」の解	2
博物館のあゆみ	50

徳川歴代将軍の「書」に見える「歌」の解

森 伊 左 夫

ここに載せた徳川歴代将軍の歌は、昭和46年度に本館が行った『徳川歴代将軍の書画』調査から得たものである。各将軍がどのような古歌を選んだか、またはどんな歌を自作したかを知することは、その将軍を理解する上で一つの手がかりが得られると思われる。ここでは歌のみを取り上げてその解を試み、さらに歌をとおして各将軍の個性を探ってみることにした。

なお歌の前に記した番号は、弊館発行の資料集2『徳川歴代将軍の書画』の整理番号である。

(編 者)

初代将軍家康



書 71 和歌「こひすてふ云々」 徳川義宣氏蔵

書71 こひすてふわか名はまたき立ちにけり

ひとしれすこそおもひそめしか

この歌は『拾遺集卷十一・恋一』に出ている壬生思見の歌で、「天曆の御時の歌合に」と詞書がある。いわゆる天徳歌合の時、平兼家と組んで負けた「忍ぶ恋」の歌で、百人一首にも採られている。

恋をしているという浮名は、早くも世間に立ってしまった。人に知られまいと、あの人を思い初めたのに一の意味。

家康が何故この歌を選んで書いたのであろうか。共感を覚えたからであろうか。

書72 みとりたつ松もさかへのあした哉

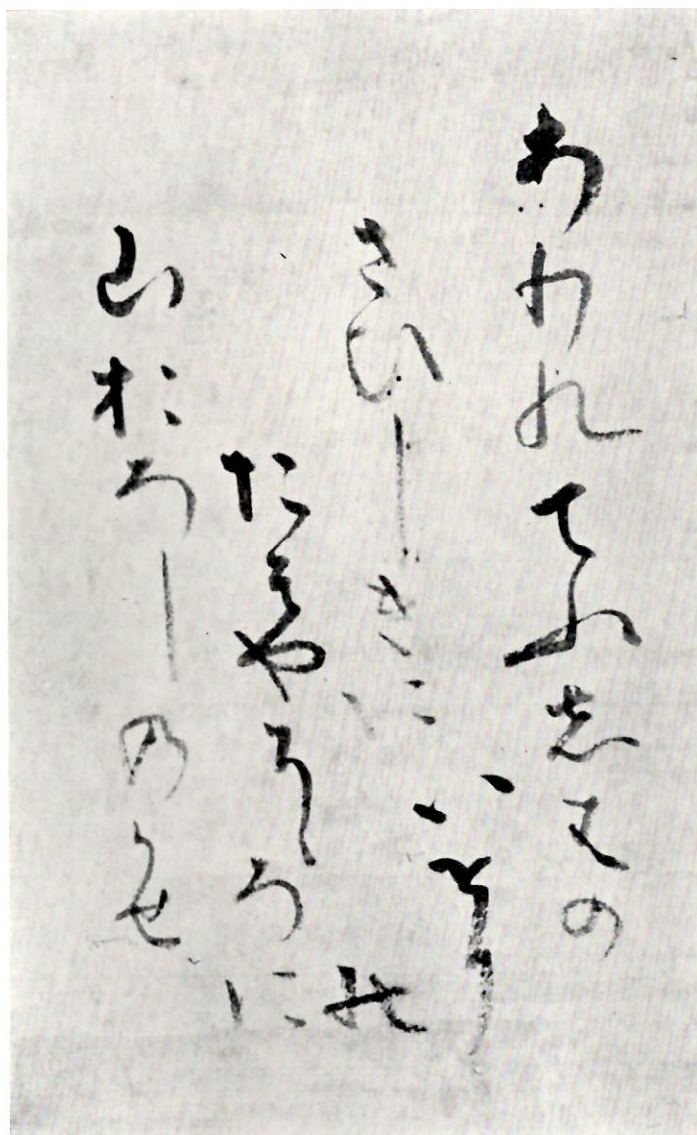
家康の自作と思われる句である。「さかへ」はヤ行下二段の動詞の連用形が名詞となったものであるから「へ」は誤りで、「さかえ」が正しい。

松のみどりも伸び立って、いよいよ盛りを見せている。今朝のすがすがしさよ。世の栄えもこの色濃き松の栄えによせて思われることである一の意味。



書72 発句短冊「みとりたつ松もさかへ」

紀州東照宮蔵



書 73 和歌「あわれてふ云々」 前田育徳会蔵

書73 あわれてふしはのいをりのさひしきに
たそやそそろに山おろしのかせ

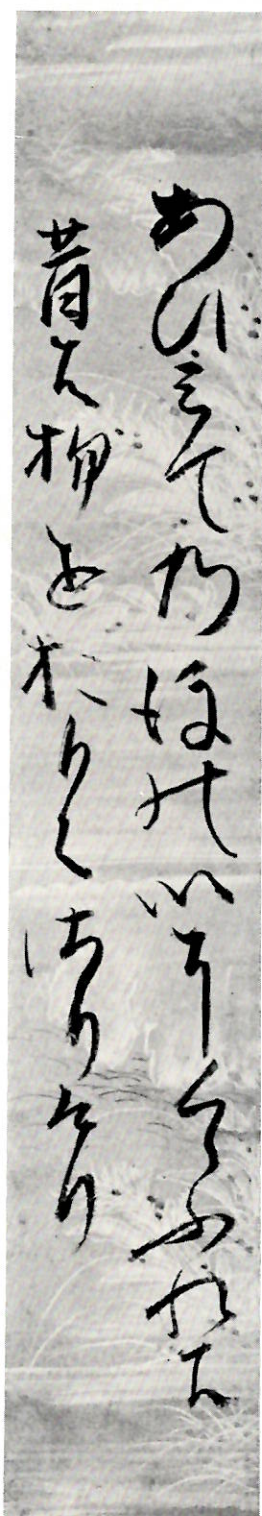
「豊臣秀吉詠歌」といわれている歌であるが、難解の歌である。

世間では、あわれだと言われている粗末な柴の庵である。ただでさえ淋しいそのわび住いに更に淋しさを加える様に、山おろしの風みたいにな、それとなくわびしさをそそるのは誰なのであろうか—の意味であらうか。「いをり」は「いはり」が正しい。



書 74 和歌短冊「ふしの山云々」

徳川黎明会蔵



書 75 和歌短冊「あひまての云々」

仙台市博物館蔵



書 76 和歌短冊「よし野山云々」

松平綾子氏蔵

書74 ふしの山みねのゆきこそ時しらね

をつるこの葉の秋はみえけり

家康の自作と思われる歌である。「をつる」は仮名遣いが誤っており、「おつる」でなければならない。

富士の山は、いつも頂上に雪をおいて、季節の変化を知らない様であるが、落ち散る木の葉によって、麓に秋の来たことがわかる一の意味。

書75 あひミテの後の心にくらふれは

昔は物をおもはさりけり

『拾遺集卷十二・恋二』にある中納言敦忠の歌で、「題知らず」とある。『古今六帖』には「後朝」の歌としてあり、また百人一首にも採られている。

この様に、逢ってから後の苦しい恋心にくらべると、逢わなかった昔は、こんなになげなかったものを一の意味。

この歌も、先きの歌と同様に、何故家康が選んだか興味の引かれることである。

書76 よし野山花まつ頃の朝

心にかかるみねのしら

家康の自作と思われるが、「朝」の下と、結句の「しら」の下が不明である。「朝」の下に「風」を、「しら」の下に「ゆき」をあてはめると、「雪が消えないので、つめたい朝風が吹き、そのために桜の開花が遅れることに気をもんでいる」ととれる。「峰の白雲」ならば、「櫻花」にたとえたものとみて「朝風のために、満山の櫻花の散ることが気にかかる」となって意味が通る。

吉野山の開花を待っている頃の朝風は、まことに気にかかることである。頂の方にはまだ冬の物である白雪が消えずに残っていて一の意味であろうか。

書77 花ハまたなつ野の原の志けミより

くれないくるる山となてしこ

家康の自詠であろうか。「くれないくるる」は意味がわからない。「くれないくるる」ならば、「括り染め」の意味にとれる。いずれにしても第四句が難解な歌である。「くれない」が正しい。「山と」は「大和」である。

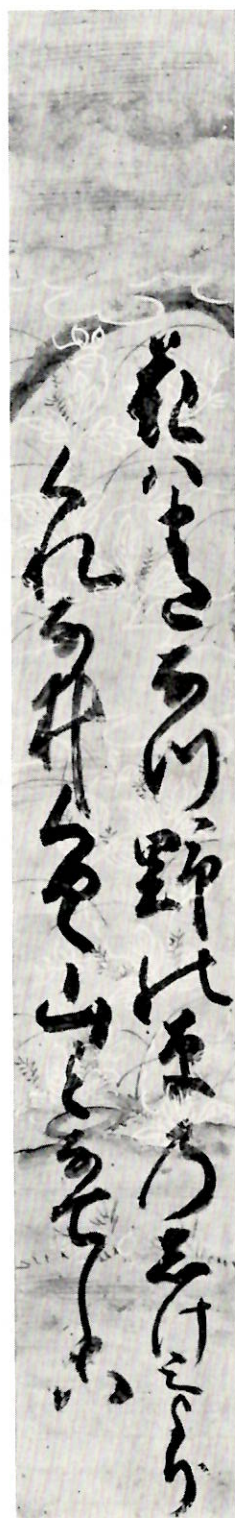
美しい花は沢山あるが、この花も可憐な花の一つである。夏野の草原の茂みから、紅のしぼり染の様に咲き出す大和撫子の花も一の意味であろうか。

書78 我みても久しくなりぬ住よしの

きしの姫まついく代へぬらん

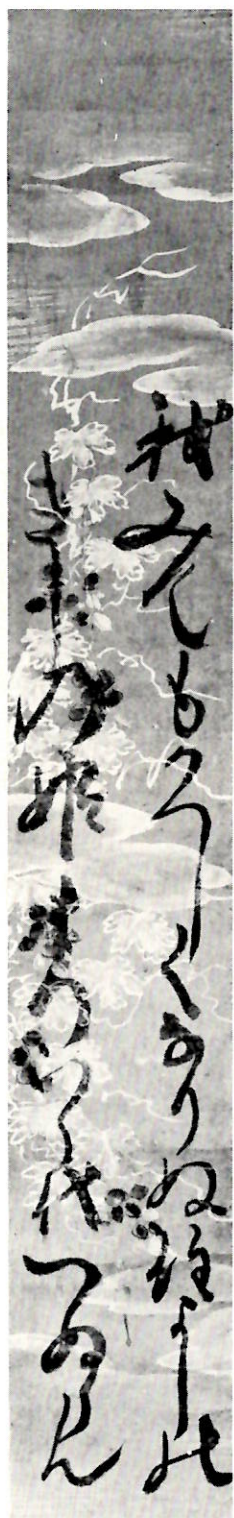
この歌は『古今集卷十三・雑上』にある「読人知らず」の歌で、『古今集』の初句は「わが見ても」となっている。

わたしが見るようになって、すでに永い年月がたった、住吉の海辺にある姫松は、どれほどの年を経てこのような老松になったのであろうか一の意味。



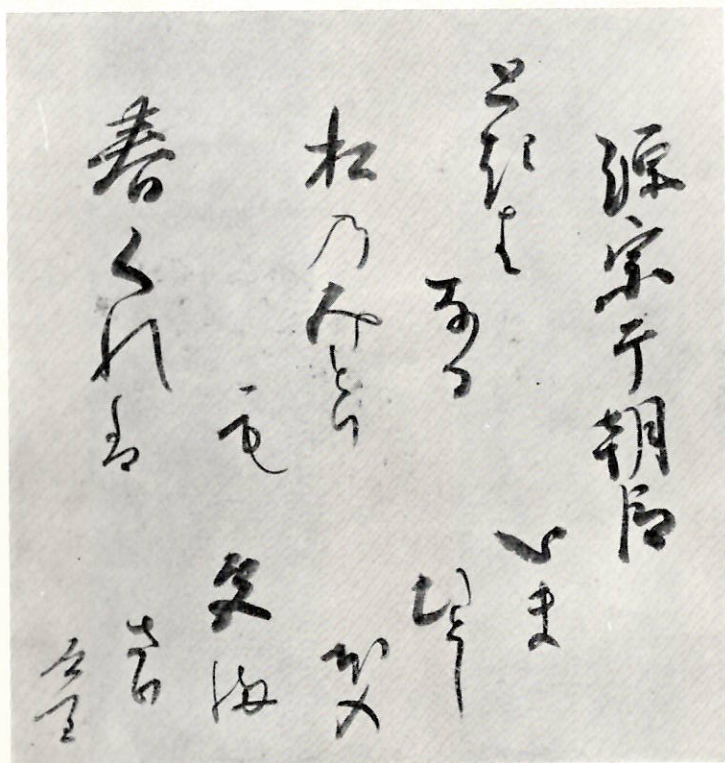
書 77 和歌短冊「花ハまた云々」

松平頼庸氏藏



書 78 和歌短冊「我みても云々」

松平頼庸氏藏



書 79 和歌色紙「ときはなる云々」 水府明徳会蔵

書79 ときはなる松のみとりも春くれは
いまひとしほの色まさりけり

『古今集巻一・春上』にある源宗于の歌で、「寛平の御時、後の宮の歌合によめる」と詞書がある。

変らないようにみえる松の緑の色も、他の新葉木のように、春が来ると今一層緑の色が加わって美しくみえる一の意味。

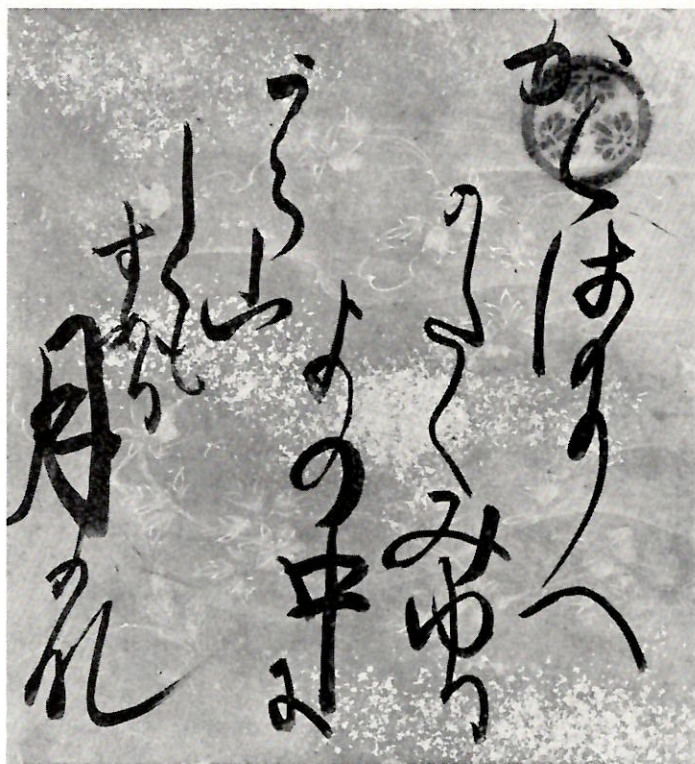
書81 かくはかりへかたくみゆるよの中に
うら山しくもすめる月かな

『拾遺集巻八・雑上』にある藤原高光の詠んだ歌で、「法師にならむと思ひ立ちける頃月を見侍りて」と詞書がある。『高光集』には「村上の御門かくれさせ給ひての頃、月をみて」となっている。世の無情を感じ、出家をと思い立った時の歌であることがわかる。

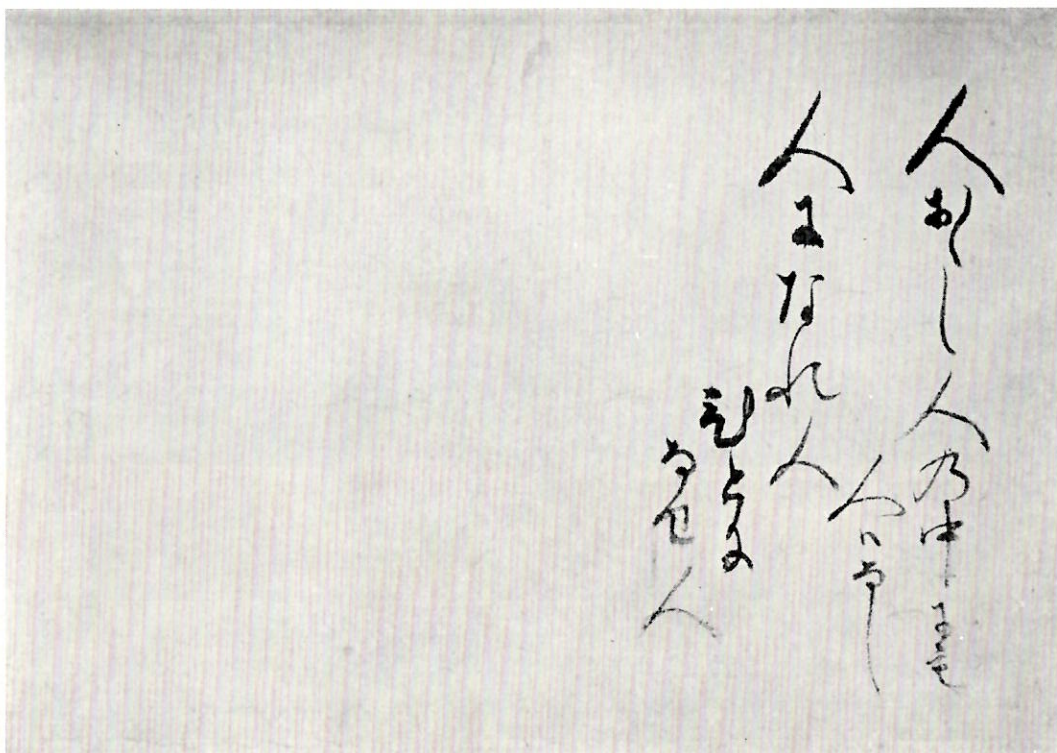
このように過ごしにくく思われるこの世の中なのに、大空の月だけは、うらやましいほどすがすがしく澄んでいることよ一という意味。「うら山しく」の「山」はあて字である。

自分の心は歎きが多いのに比べて、さやかにすんでいる月を羨しく思う気持ちを詠んでいる。家康も、このような歌に共感を覚える時があったのであろうか。

書83 人おとし人の中にも人へなし
人になれ人ひとになせ人



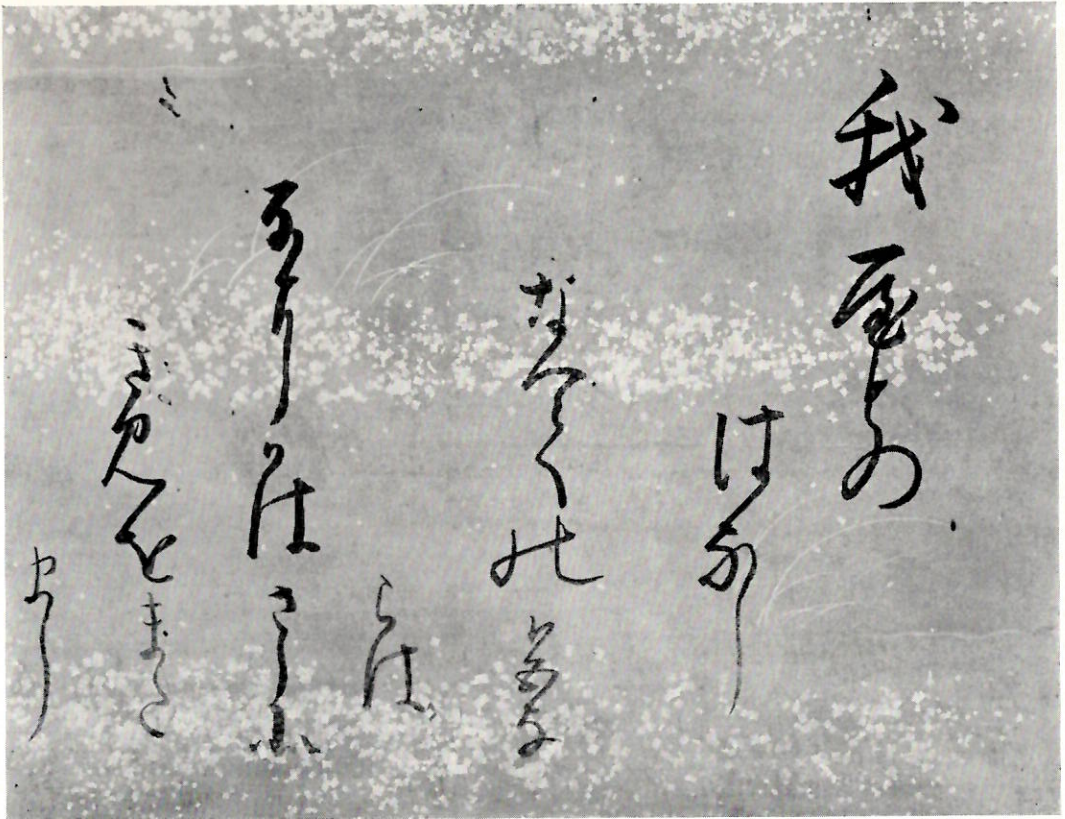
書 81 和歌色紙「かくはかり云々」 柳沢文庫蔵



書 83 和歌懷紙「人おし云々」 駿府博物館蔵

『松翁道話』（布施松翁著・心学書）には、「人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人になせ人」とある。部分的に文字に異なりがあるが、記憶ちがいで書いたのであろうか。

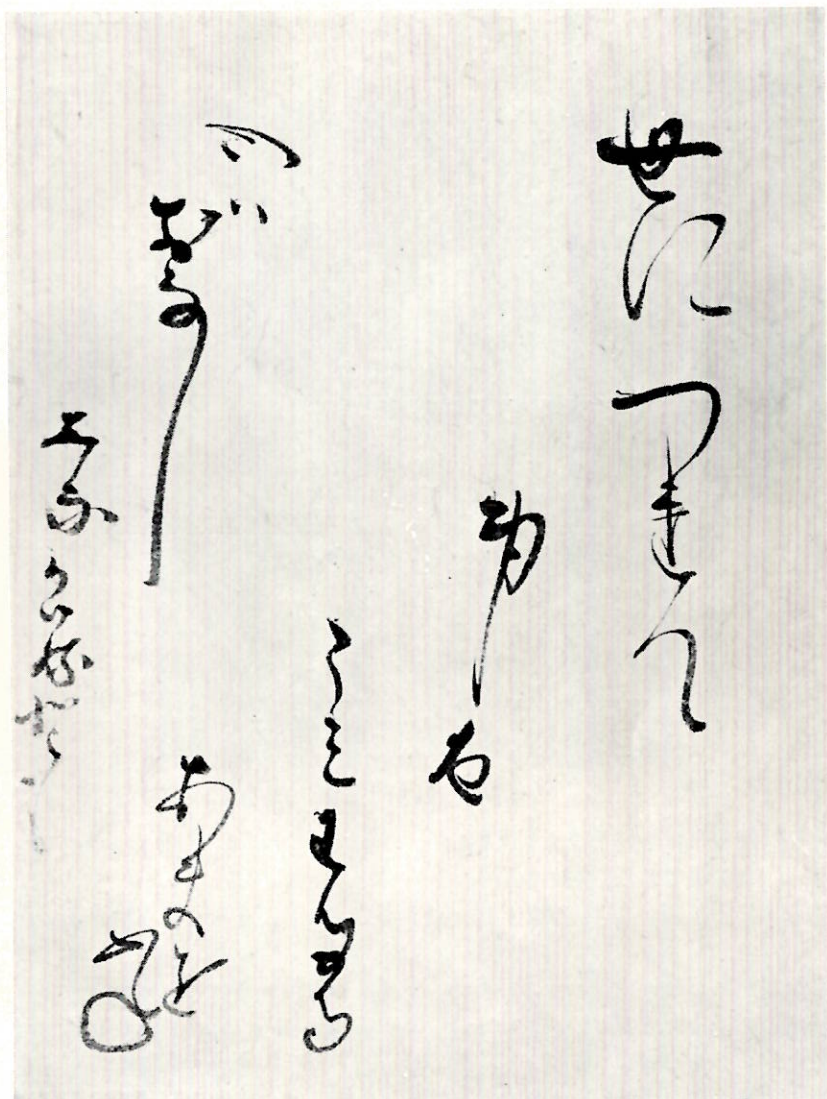
世の中には、随分多くの人があるが、その中で、人として恥ずかしくない人というものは、なかなかいないものだ。人らしい立派な人になれ。人よ。立派な人にせよ。人よ。—という意味。「人おおし」は「おほし」が正しい。



書 80 和歌懐紙「我屋との云々」 日光輪王寺蔵

書80 我屋とのはなしなへての花ならば
なにかはさらにきみをまたまし

『源氏物語・花宴の巻』に出ている歌で、『源氏物語』では“私の宿の桜が、もし普通の花でしたら、どうして改めて貴方をお待ち申しませうか。特別美しい花だからむかえるのです”の意味であるが、家康は、例えば「花」を「物を言う花」の様に、別の意に解したのではないだろうか。

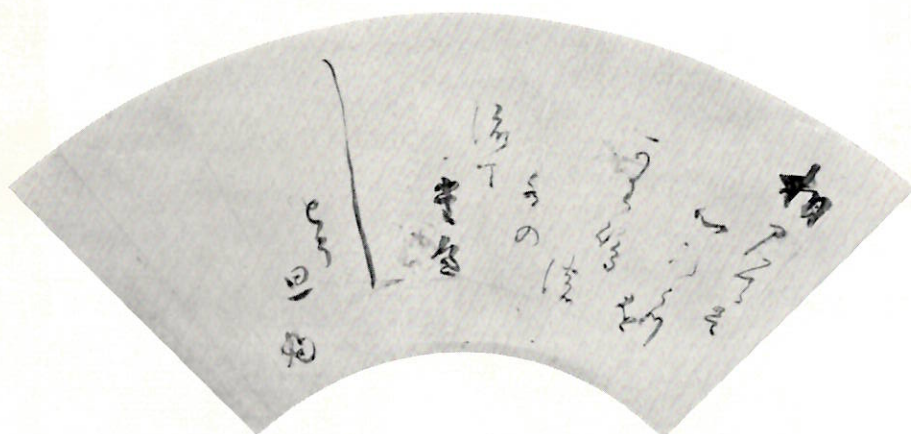


書 84 和歌懐紙「世につれて云々」 久能山東照宮博物館蔵

書84 世につれて身はうミわたるあまをふね
心はおなしミなかはるとも

家康の自詠と思われる歌である。第五句の「ミなかはるとも」の「ミな」がわからない。「みを」ならば水脈のことである。

世の中が変化していくにつれて、自分の身体は海を渡る漁師の小舟のように不安定であるが、心だけは変ることではない。たとえ（水脈が変って）世の人々が時流にながされるとも一といった意味であろう。身と心とを対照的に言っている。



書 84 和歌扇面「相見ては云々」 水府明徳会蔵

書85 相見ては心ひとつをかは島の
水の流てたえしと思ふ

『伊勢物語・二十二段』・『続後撰集』に、業平の歌とある。また『太平記』にも所収されている。

初句「あひ見ては」は定家本によるもので、塗籠本の「逢ひは見で」の方がよい。

『伊勢物語』の話は次の通りである。「昔、通いつ通わせつしていた男と女が、これという理由もなく、その仲が絶えてしまった。が、忘れはしなかったのであろう。女の方から歌を贈って来た。「憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつ猶ぞ恋しき」—あなたのしたことを憂く思いながらも、やはりあなたを忘れられないので、一方ではつらい人と恨みながらも、一方では恋しい人だと思っています—と言ってきた。男は、それみたことか、自分の思った通りだと言って、返しの歌を送った。それがこの歌である。

逢うと前のようないやな事も起るから、おたがいに逢わずに、心でだけ思いを交し合っていく。あの河の中にある島をめぐる流れる水が、その島に妨げられて別れるが、また一つに合って絶えず流れているように一の意味。

「逢ひ見ては」では「心ひとつに」に意味が通りかねる。「逢ひは見で」とあるべきである。「あひみては」の方をとると、一互に相合っては心だけをかわよせて、島をはさんで一度別れた水が、再び一つになって絶えず流れて行くように、清い交りをしょう一の意味になる。

この歌は、一度別れた女に贈った歌で、先の二首と同様に、家康がなぜこのような歌に心をひかれたかが興味深い。



絵 5 梅 鳩 図 山岡莊八氏蔵

絵 5 年のうちに春も立枝の梅のはな
けさ猶色を重ねてや咲

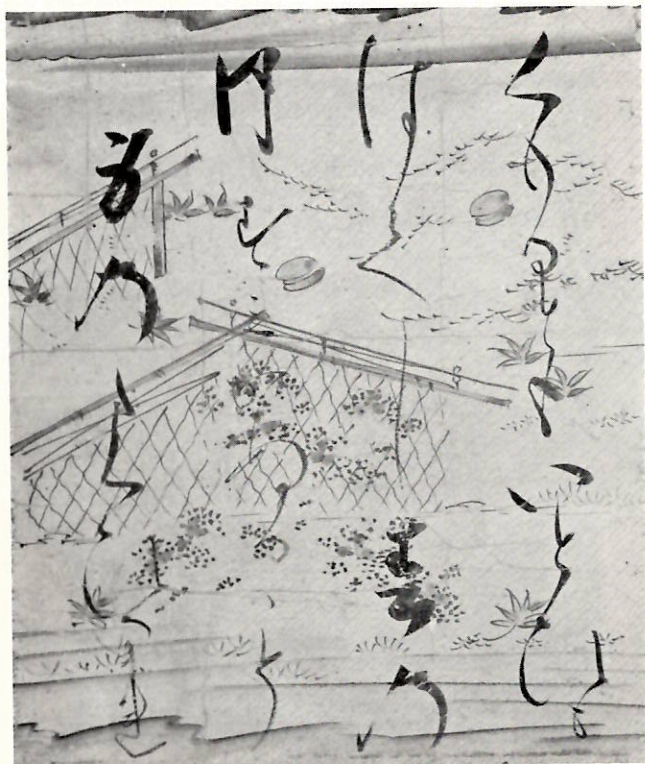
梅の枝に鳥がとまっている自作の絵に賛をした歌で、『福德』の印章がおされている。

「春も立枝の梅の花」は、春がたつ、すなわち立春と、立ち枝とが掛言葉になっている。旧暦では、春は暦の上の立春とともに来るものとしていたが、立春は例外を除いては新年と同月であった。例外は閏月が出来、年内に立春となることがあったのである。「けさ」とことわっているのは、元朝を暗示しているのであろうか。

年内に春が立って、高くのびた枝に、今朝は一層色を美しく添えて梅の花が咲いていることよ一の意味。

以上が家康の染筆した歌である。家康のものは、他に比べて誤字、脱字が多く、また仮名遣いの誤りも多くみられる。したがって、自作と思われる歌も、意味の通りにくいものがある。古典から採っている歌は、家康の学殖というよりも、むしろ耳からうろ覚えに知って書いたものといった感じがする。恋の歌を採っている点には興味が引かれる。

二代將軍秀忠



書 114 和歌色紙「くもるとも云々」 前田育徳会蔵

書114 くもるともいとひもはてし春の月
すみかぬるこそ身のたくひなれ

秀忠の自詠と思われる歌である。

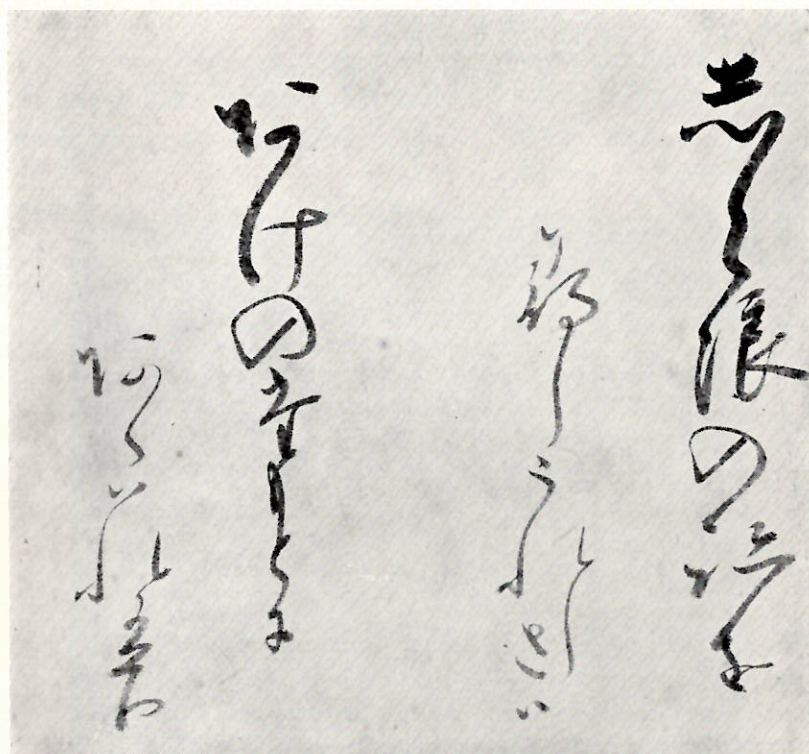
曇っていることをいやがりもしないでいる春のおぼろ月よ。おまえが澄んでみえない姿こそ、この世に住みかねている我が身と同じ類なのである一の意味。

我が身を住み憂く思っているのと、春の月が雲に邪魔されて、曇って見えるのと同じと見たてている歌である。

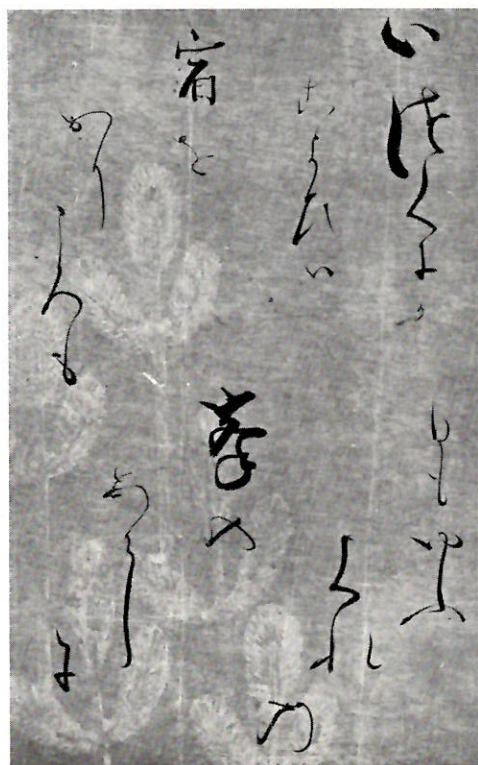
書115 志ら浪の跡を尋しうれしさハ
あけのたもとにあらはれにけり

『新千載集卷十七・雑上』に出ている如願法師の歌である。如願は藤原秀能の法名で、「建保四年の春、藤原秀能、五位尉にて東寺の舎利のぬす人召捕りて、その賞に出羽守兼ね侍りけるあしたに詠みて遣しける」と詞書にあるように、赤い衣を着る五位の尉に、さらに出羽守を兼ね重ねたことを祝って、津守国経が「あけながら重ねてけりなから衣たつ白浪のあとを尋ねて」と歌をくれたのに対する返歌である。

白浪（盗人）を探し捕えた手柄によって、賞を得た嬉しさは、五位の者の着る赤い衣の袖にもあらわれている一の意味。



書 115 和歌色紙「志ら浪の云々」 徳川黎明会蔵



書 116 和歌色紙「いづくにか云々」 徳川黎明会蔵

書116 いづくにかこよひハ宿をかりころも

日もゆふくれの峰のあらしに

『新古今集卷十・羈旅』に出ている藤原定家の歌で、「摂政太政大臣家歌合に『羈中ノ晩嵐』といふことをよめる」と詞書があるように、正治元年の藤原良経家冬十首歌合せの歌である。

『拾遺愚草』・『曾我物語』にも所収されている。

どこに今宵は宿を借りようか。今日もまた夕暮れとなって、峰から吹きおろす秋の嵐がわびしいのでーの意味。



書 117 和歌色紙「花なかす云々」 松平綾子氏蔵

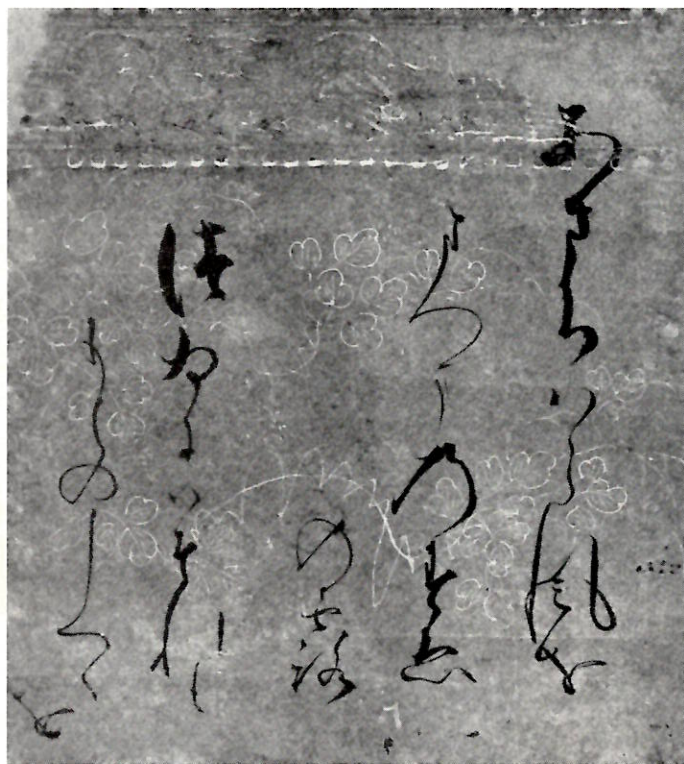
書117 花なかすせをもみるへき三日月の
われて入ぬる山のをちかた

『新古今集卷二・春下』にある坂上是則の歌で、『是則集』にも所収されている。

「紀貫之、曲水宴し侍りける時、月入リテ花ノ灘暗シといふことをよみ侍りける」の詞書がある。「月入花灘暗」は、漢詩の一句を題としたもので、月が没して、落花を浮べた川の早瀬が暗いーの意味である。

桜の花を浮べて流れている細い川瀬をも、その光で見ることが出来る三日月が、片割れ月の形となって山のあなたに没してしまったーの意味。

秀忠はこのような歌の心をも、味い得ていたと思われる。



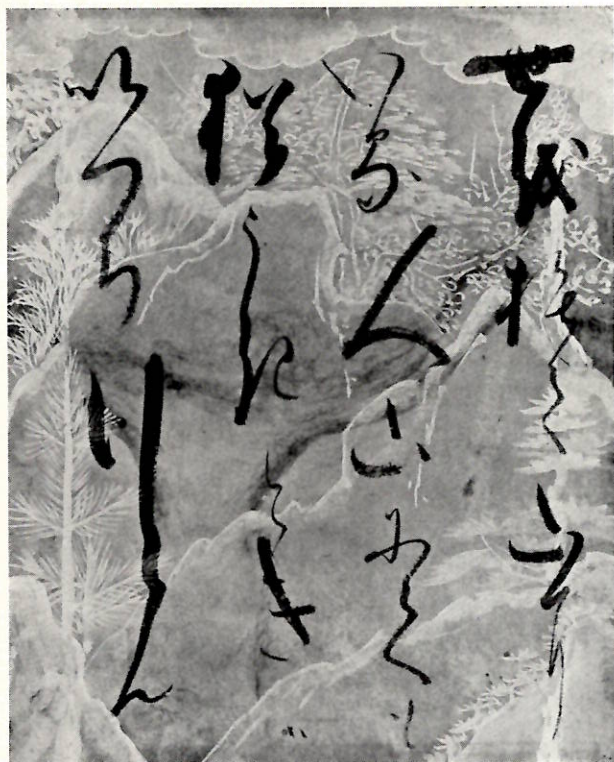
書 118 和歌色紙「あさちハラ云々」 水府明徳会蔵

書118 あさちハラ風をまつまのすゑの露
つるにハそれももとのしづくを

『続古今集卷八・釈教歌』にある大蔵卿有家の歌で、「本末究竟等の心を」という題がついている。

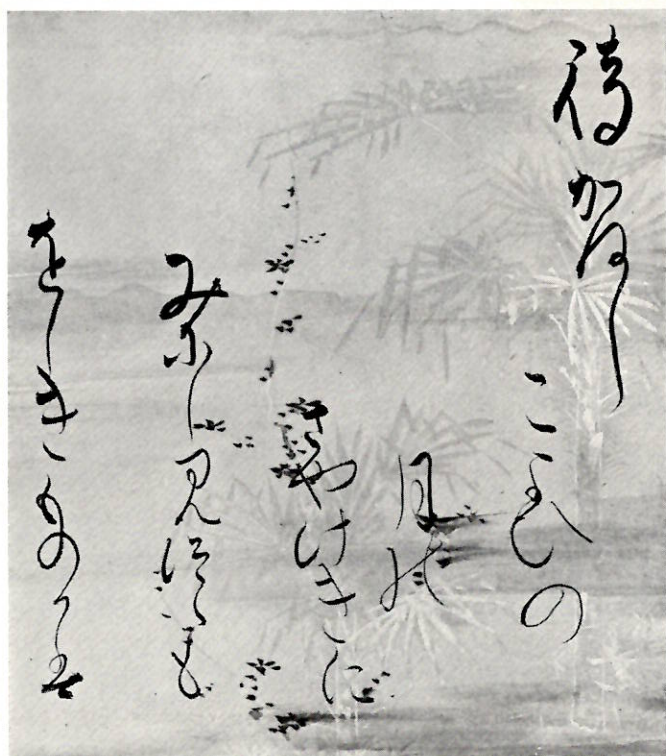
いま浅茅原の茅の葉末に宿っている露も、風がふけばすぐにこぼれおちるだろう。風がふいて来るまでの命なのである。こぼれればもとの雫にかえってしまうのである。物事の本も末も結局は同じことで、本・末に別れて見えるのも、所詮は一時的な現象にすぎないのである—の意味。

人の命、生涯といったものを暗示している。



書 121 和歌色紙「世を捨て云々」

酒井忠博氏蔵



書 122 和歌色紙「待かねし云々」

日光東照宮蔵



書 123 和歌懐紙「いかにせん云々」 日光東照宮蔵

書121 世を捨て山にいる人山にても

猶うきときハいつち行らん

『古今集卷十八・雑下』にある凡河内躬恒の歌で、「山の法師のもとへつかはしける」と詞書がある。この「山」は、おそらく比叡山であろう。

世を捨てて山へ入った人よ、山にいてもなお憂い時には、どこへ行くのであろうか。その憂さをどう解決するだろうか—の意味。

書122 待かねしこよひの月のさやけきに

みにしみつつもをしきものかは

秀忠の自作と思われる歌で、素直である。

「こよひの月」というのは特定の月のことで、ここでは中秋の月かと思われる。

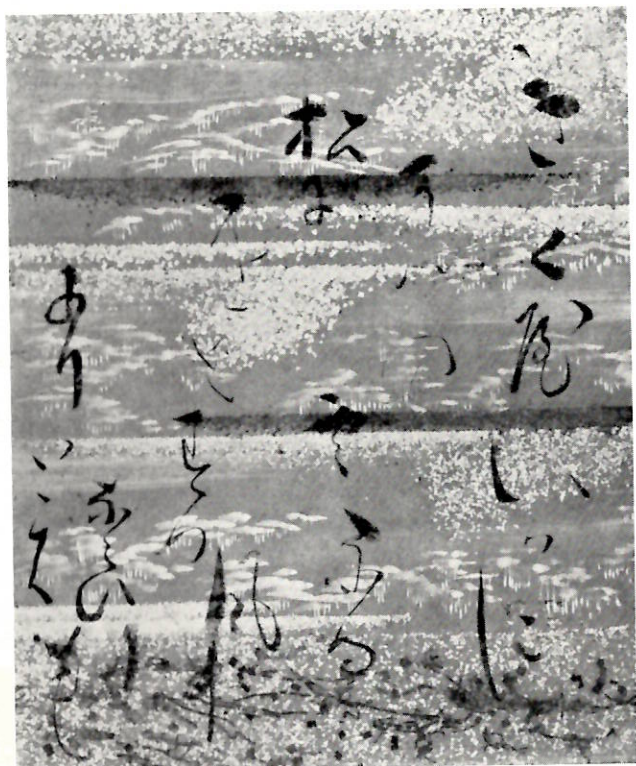
待ちかねていた今夜の月が、あまりにも澄んでいるので、いくら見てもあきることがない—の意味。

書123 いかにせんいかにせんとそいはれける

物おもふときのひとりことには

秀忠の自作と思われる歌で、嘆いている時の独言として「どうしょう、どうしょう」という言葉ばかりが自然と口から出てしまう。秀忠の素直な心持がよくわかる。

どうしょう、どうしょうとばかり口から出てしまったことだ、深い嘆きをしている時の独言として—の意味。



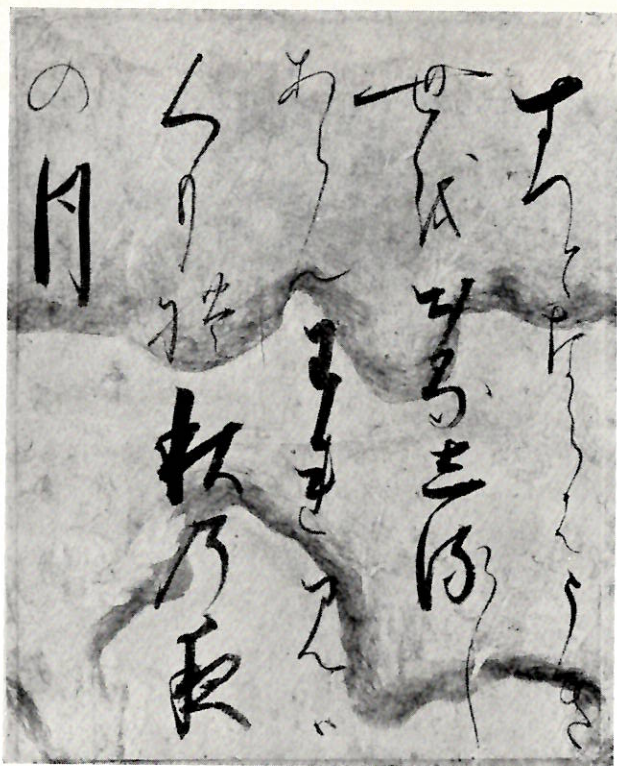
書 119 和歌色紙「きく屋いかに云々」 徳川恒孝氏蔵

書119 きく屋いかにうハの空なる風たにも
松にをとするならひありとは

『新古今集卷十三・恋三』にある宮内卿の歌で、建仁2年9月の十三夜に、「寄風恋」の題で詠んだ水無瀬恋十五首歌合せの歌である。「をとする」は「おとする」である。「音する」と「訪づる」をかけてある。

どのように聞いたら良いのか。私の心はうわの空で落ちつかない。浮気な風でさえも、松を吹いて音を立てるのが普通であるのに、あなたは何故待っている私を訪れて下さらないのですか—の意味。

逢い初めた男が、逢わなくなったのを恨む心を歌っている。『謡曲隅田川』にも所収されている。



書 120 和歌色「すつとなら云々」 松平康春氏蔵

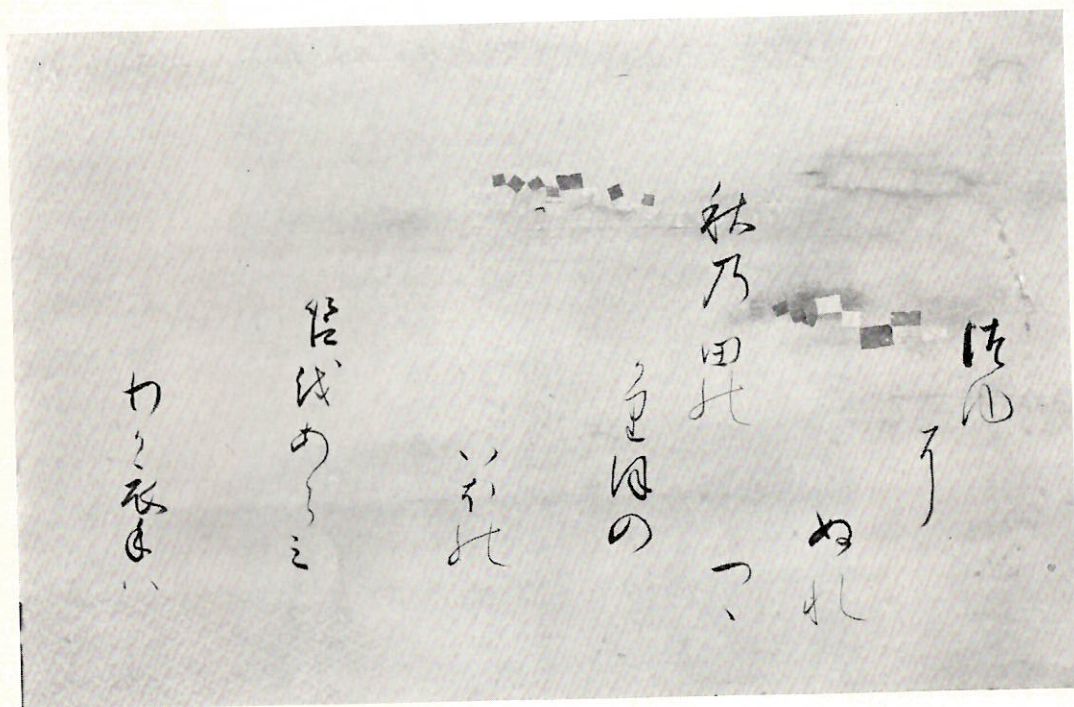
書120 すつとならほうき世を出るしるしあらん
われ見はくもれ秋の夜の月

『新古今集卷十六・雑上』にある西行法師の歌で、「題しらず」とある。

異本には、第二句「浮世をいとふ」、第四句「我にはくもれ」となっている。

棄てたというものならば、浮世を厭う証拠があり、在俗のことなど思い出さないであろう。我が見たときは、曇って見えずにいてほしい秋の月よ一の意味。

遁世の身が、秋の夜の月に催されて、世にあったころのことを思い出してきたため、その思い出したということに省察を加えて、これは浮世を厭って棄てた証拠にならないことだと、不本意というよりは、むしろ憤りを発した心である。

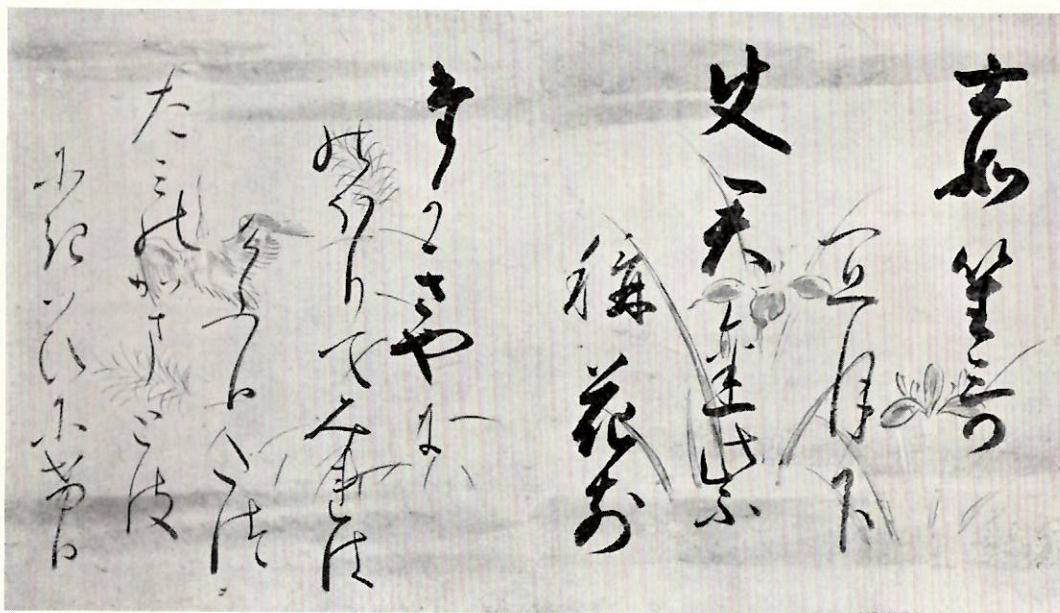


書 125 和歌懷紙「秋の田の云々」 日光東照宮蔵

書125 秋の田のかりほのいおの苫をあらミ
わか衣手ハつゆにぬれつつ

『後撰集卷六・秋中』にある「題しらず」の歌で、天智天皇の歌といわれており、『万葉集卷十二』にある作者不詳の「秋田刈るかりほを造り我が居れば衣手寒く露ぞ置きける」の類歌が、後世天智天皇の御製として誤まり伝えられたものであろうか。百人一首にも採られている。「いお」は「いほ」である。

秋の田の仮の番小屋の屋根の苫の目があらいで、私の袖は隙間をもる露に濡れつつある一の意味。



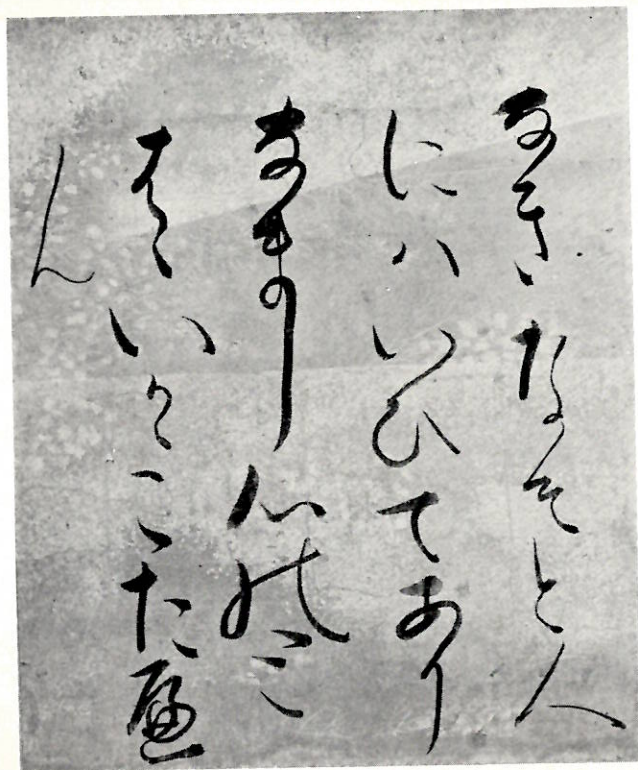
書 126 詩歌色紙「たかきやに云々」 酒井忠博氏蔵

書126 たかきやにのほりてみれはけふりたつ
たミのかまとはにきハひにけり

『新古今集卷七・賀』に仁徳天皇御歌として載せられている歌であるが、仁徳天皇の歌とするのは誤伝である。醍醐天皇の延喜6年の日本紀寛宴の時、藤原時平が「仁徳天皇」の題で、その御徳を詠んだ「高殿にのほりて見れば天の下四方にけふりて今ぞ富みぬる」とあるものを、天皇の御製と誤り伝えたものであろう。『和漢朗詠集』・『古来風体抄』・『水鏡』・『源平盛衰記』・『神皇正統記』などにも所収されている。

高い屋に登って遠望すると、炊煙が立っている。民のかまどは煮炊きの物が豊かになっていることよ一の意味。

以上が秀忠の歌である。秀忠は『新古今集』などの古歌を多く「書」にしており、秀歌と思われるものを多く撰んでいる。他の将軍に比べて鑑賞理解の能力がすぐれていたと思われる。また、厭世的な歌に心をひかれているようなところが見られる。秀忠の自作と思われる歌は、他の将軍の自詠と思われる歌に比べてすぐれているように感じられる。



書 146 和歌色紙「なきなそと云々」 水府明徳会蔵

書146 なきなそと人にはいひてありなまし
心のとははいかこたへん

『後撰集卷十一・恋三』にある「読人知らず」の歌で、「親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしは人にしられじといひ侍りければ」という詞書がついている。この詞書からみると、親の眼をぬすんで逢っている二人の、男の方が、しばらくはこの関係を秘密にしておこうと言ったのに対する女の歌である。

無実の評判ですと、他人にはいっていられませんが、自分の心をだますわけにはいかない一の意味。

家光はこの恋の歌を、道徳的な意味でとらえていたのかも知れない。



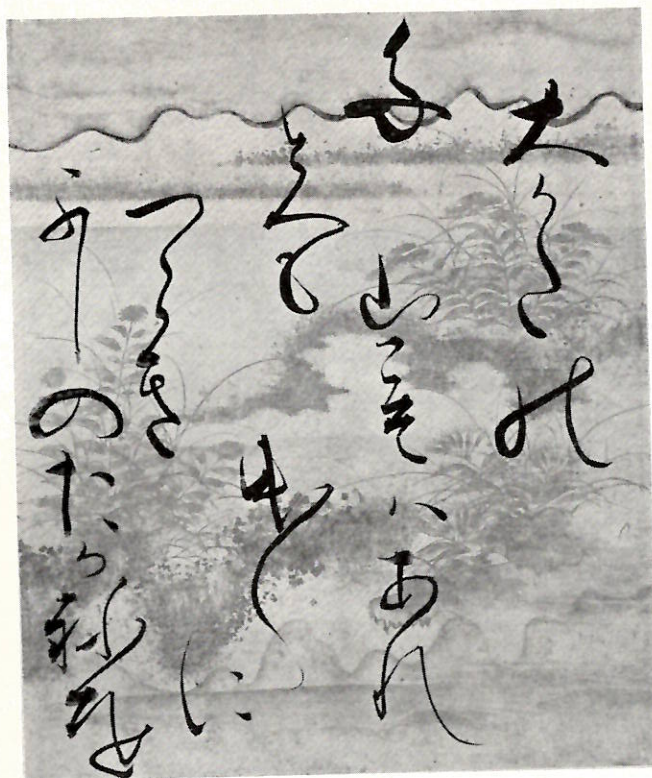
書 147 和歌色紙「暮ぬとは云々」 水府明徳会蔵

書147 暮ぬとはおもふものからふちの花
さきけるやとにハ春そ久しき

『新古今集卷二・春下』にある紀貫之の歌で、「清慎公ノ家ノ屏風に」の詞書がある。清慎公は藤原実頼のことである。屏風絵を題に詠んだ歌を貼り混ぜにしたもので、絵は藤を主とし、家をかき添えたものである。『貫之集』によると、天慶3年4月の歌とある。

春が暮れたとは思ふものの、しかし、藤の花の咲いているこの邸には、めでたい春が久しくとどまっていることであろう—の意味。

表面で藤の花の久しく散らないことを言い、裏面では、実頼の家の繁栄を暗示して祝っている。



書
148
和歌色紙「大かたの云々」
徳川黎明会蔵

書148 大かたの山こそハあれ中へに
たとへもつらきふしのたかねを

家光の自作と思われる歌であるが、第三句を「なかなかに」と読んだとしても、理解しにくい一首である。

おおよそ、山という山は数多くあるが、名山であるがゆえに、富士山を何か物のたとえにすることは、気高い山だけにつらいことである。たとえにすることの出来る山ではない—の意味であろうか。

書150 うつらなくまのの入江の浜風に
尾花浪よる秋のゆふ暮

『金葉集卷三・秋』にある源俊頼の歌で、「堀河院の御時御前にておのおの題をさぐりて歌つかまつりけるに、薄をとりてつかうまつれる」と詞書がある。『古来風体抄』・『近代秀歌』・『源平盛衰記』などにも所収されている。

「真野の入江」は近江国の琵琶湖畔だといわれている。

うずらが鳴く真野の入江に浜風が吹いて来て、岸辺の尾花の穂が白く波立つようにゆれ動いている。いかにもさびしい秋の夕暮である—の意味。

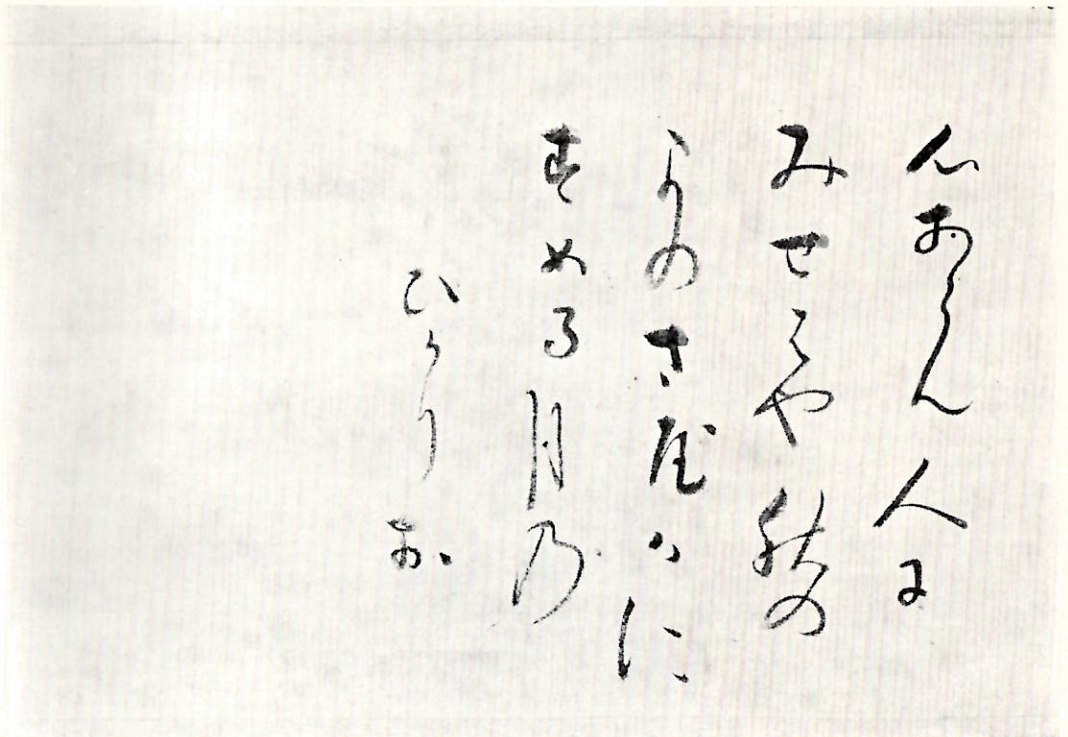
書154 心あらん人にみせはや秋のよの
さやかにすめる月のひかりお

家光の自作と思われる歌であるが、ありきたりの言葉をつなぎ合せて一つの歌にした感じがする。「ひかりお」は、「ひかりを」でなければならない。

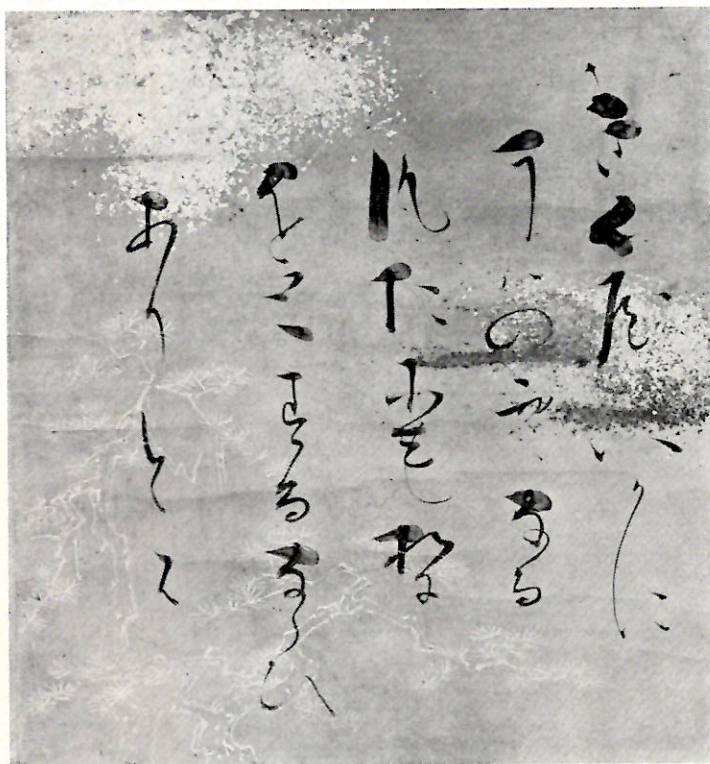
風流を理解出来る心を持っている人に、是非とも見せたいものである。秋の夜の光さやかに澄んでいるこの月を一の意味。



書 150 和歌色紙「うすらなく云々」 日光東照宮蔵



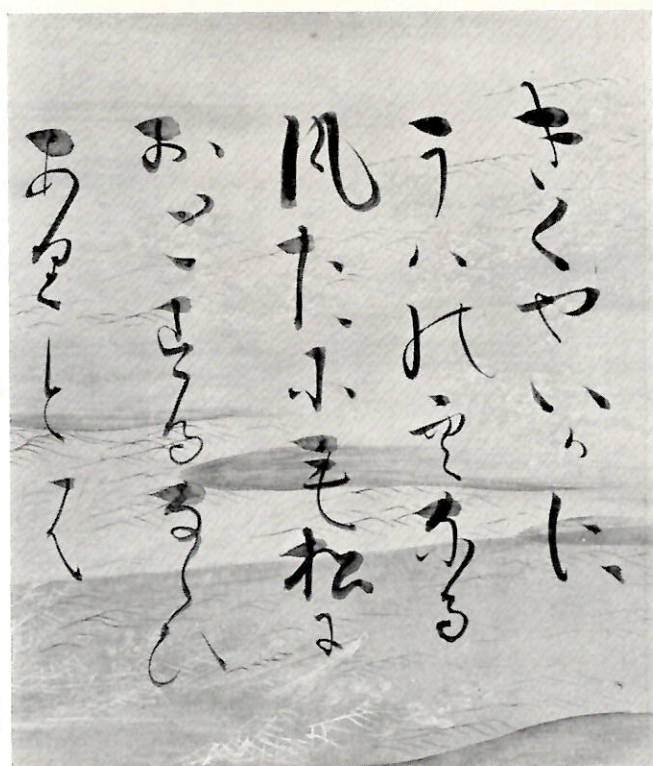
書 154 和歌懷紙「心あらん云々」 久能山東照宮博物館蔵



書
149

和歌色紙「きくやいかに云々」

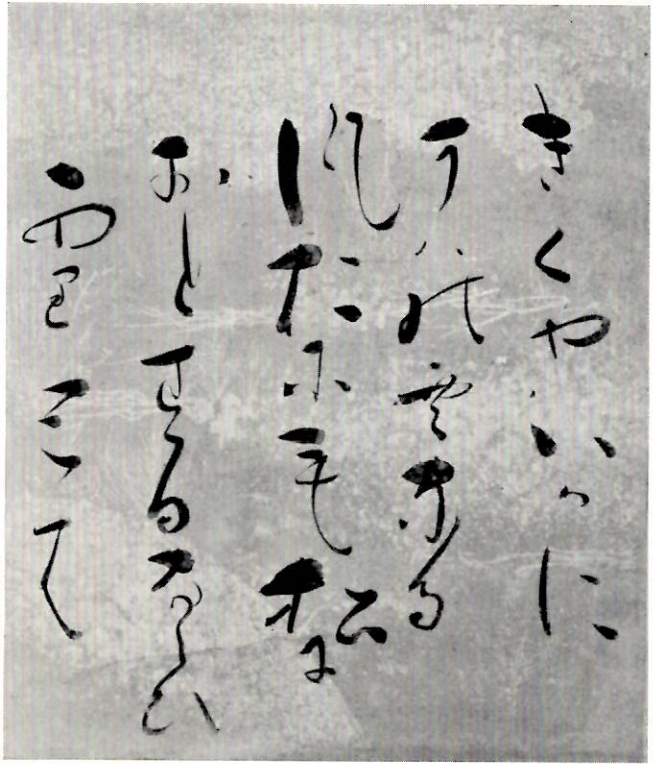
水府明徳会蔵



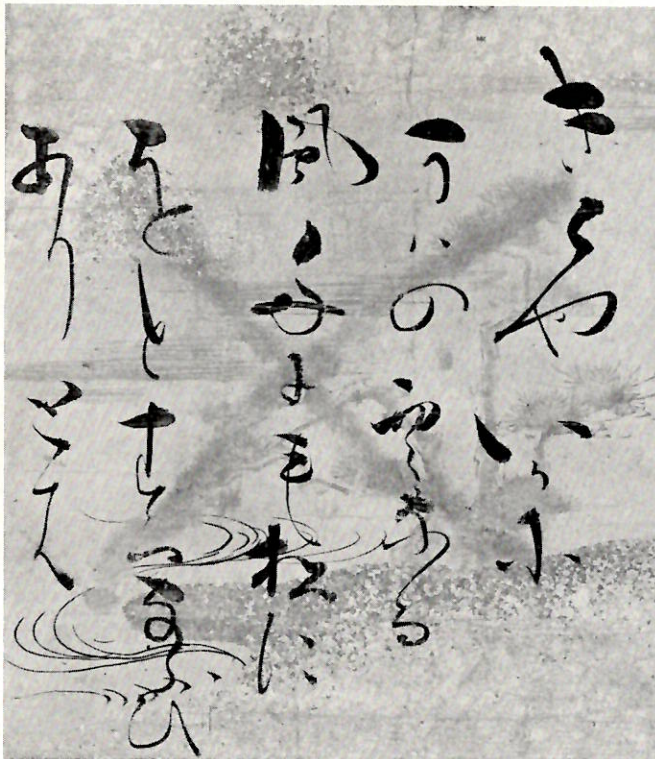
書
151

和歌色紙「きくやいかに云々」

酒井忠博氏蔵



書 152 和歌色紙「きくやいかに云々」 徳川恒孝氏蔵



書149・151・152・153

きくやいかに
うハの空なる風たにも
松にをとする
ならひありとは
先にあげた秀忠の歌（書
119）と同じ歌である。

書 153 和歌色紙「きくやいかに云々」

柳沢文庫蔵

きよみかたせき
はむかし
のなみの
せきもる
月のかけ哉

書 155 和歌懷紙「きよみかた云々」 柳生宗久氏藏

書155 きよみかたせきハむかしのなのミにて
なみのせきもる月のかけ哉

家光の自作と思われるが、これもことばをつらねて一首にまとめただけのものである。
昔の歌枕の地である清見潟の関は、その昔の名をとどめているのみで、月かげの下に、浪が
関所の跡を守っているだけである一の意味。

書158 雁かへる常世の花のいかなれや
月はいつも霞む春のよ

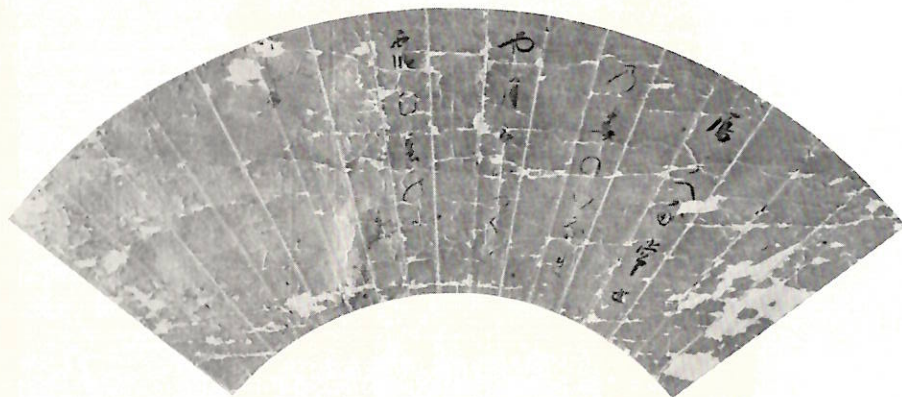
家光の自作と思われるものであるが、例によって言葉の羅列であり、意味がとりにくい。こ
じつけて解せば次の様になる。

春を見捨てて帰る雁よ、永遠に変わることがない国の花がどんなにかすばらしいので、それを
求めて帰るのであろうか。春ならば、月はどこにおいても霞んで見える春の夜であるのに。い
ずこの花も、同じことであるだろうに一の意味であらうか。

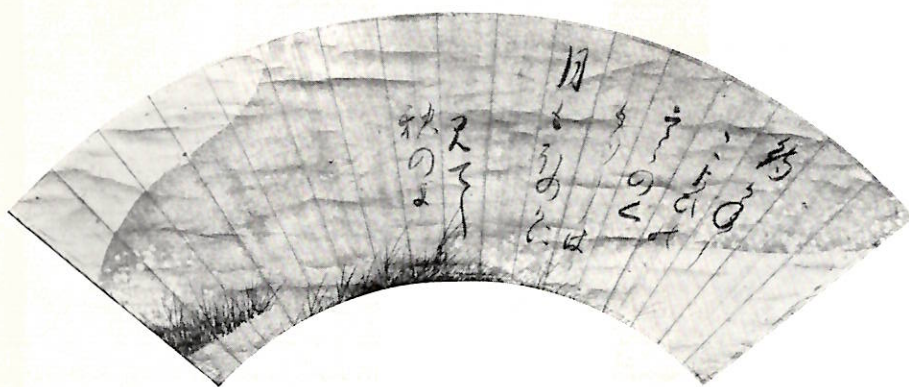
書159 待かねしこよひのそらのくもりしは
月もほのかに見てし秋のよ

この歌も言葉がならんでいるだけで、意味が通じにくい。独りよがりの客観性のない統一を
欠いている歌である。強いて解すると次の様になる。

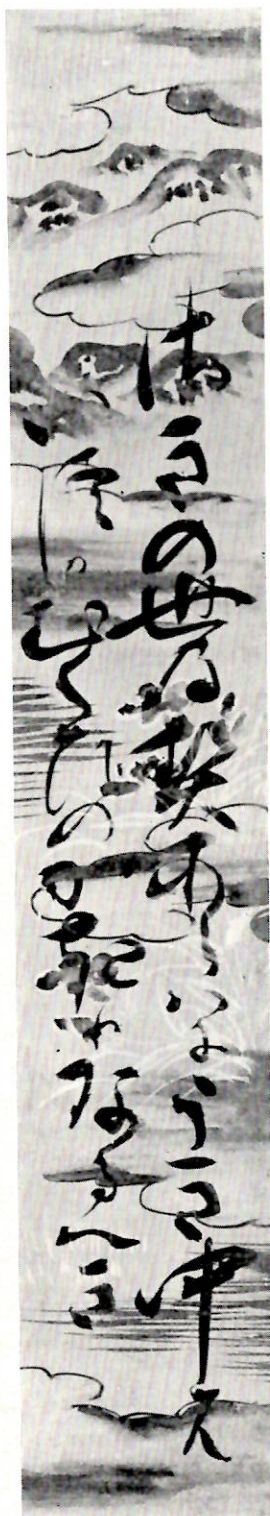
待ちかねていた今宵の空が曇ったのは、月もほんの一寸だけ秋の夜を見に顔を出しただけだ
からであらうか。



書 158 和歌扇面「雁かへる云々」 穴八幡神社蔵



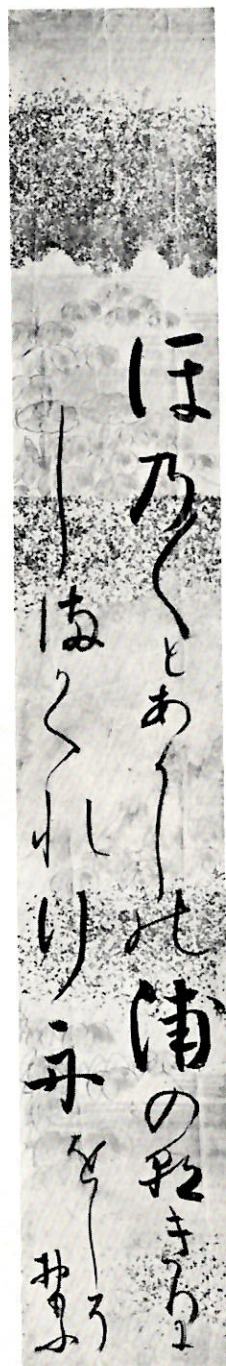
書 159 和歌扇面「待ちかねし云々」 酒井忠博氏蔵



書 156 和歌短冊「さきの世の云々」 柳沢文庫蔵



書 157 和歌短冊「さくらさく云々」 松平綾子氏蔵



書 169 和歌短冊「はのはのと云々」 堀田正久氏蔵

書156 さきの世の契あらはにうき中は

いつかむくいのかきりなるへき

家光の自作であろうが、これもよくわからぬ一首である。「前世の契り」とは仏教の因果応報の考えであろうが、言葉と言葉との関連があいまいで、一首としての統一をかいているため、何を言いたいのかよくわからない。

前世における約束ごとが、現世に明らかに現われると言うが、たしかにこのつらい世の中でのことは、すべてその応報なのにながくないだろう—といった意味であろうか。

書157 さくらさくとを山とりのしたりおの

なかなかし日もあかぬ色かな

『新古今集巻二・春下』にある太上天皇の歌で、「釈阿、和歌所にて九十賀し侍りしをり、屏風に山に桜咲きたるところを」の詞書がある。「釈阿」は俊成の法名で、俊成の九十才の祝が、太上天皇（後鳥羽上皇）によって建仁3年11月23日に、宮中で行われた。その時、屏風に題画の形で賀歌を賜ったのである。遠山桜を高齢の釈阿にたとえ、それを実景と見ての御製である。

『拾遺集巻十三・恋三』にある「足ひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし衣をひとりかも寝む」を本歌として、「恋」を「四季」にかえた歌である。

桜の花の咲いている遠山は、（山鳥のしだり尾にゆかりある）長い春の日を見つづけても、見飽かない色であることよ—の意味。「したりお」は「しだり尾」である。

以上が家光の染筆になる歌であるが、自詠と思われる歌は難解で、意味が通じない。意味の通るものは、ありきたりの平凡な詠となっている。

四代將軍家綱

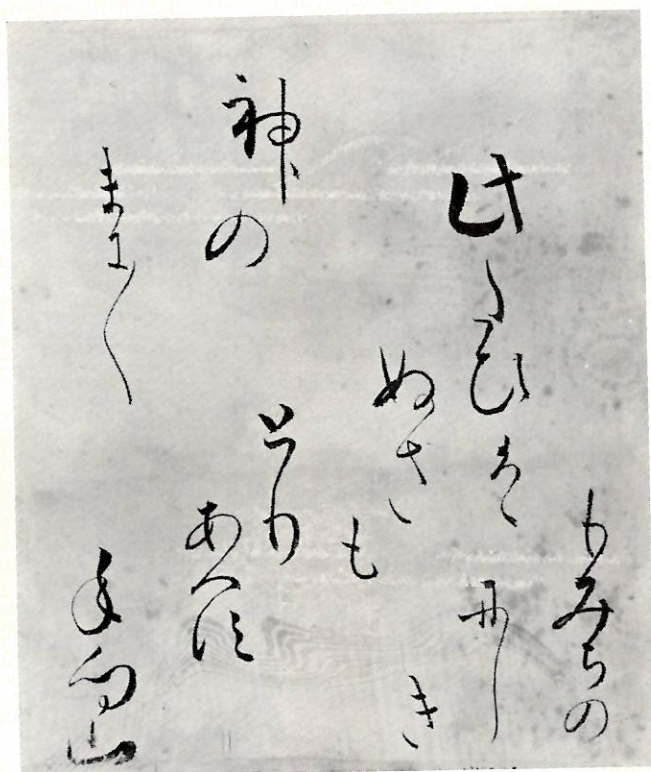
書169 ほのぼのとあかしの浦の朝きりに

しまかくれ行舟をしそおもふ

『古今集巻九・羈旅』にある「読人知らず」の歌であるが、「この歌はある人のいはく、かきのもとの人まろが（歌）なり」と左註がついている。平安時代末期には人麿の代表作とされ、人麿祭りの^{たましろ}霊代のごとくにさえ扱われた。時代の好尚からであろう。『柿本集・下』をはじめ、『今昔物語巻二十四』・『古今六帖』・『新撰和歌』・『和漢朗詠集』・『源氏物語』・『今鏡』・『平家物語』・『増鏡』・『古今著聞集』など多くのものに所収されている。

ほのぼのと明るくなる明石の浦に立ちこめている朝霧の中を、淡路島に隠れてゆく船をあわれに思うことである—の意味。

明石に上陸し、一夜をあかして、翌朝出航したのを見送った人の作であろう。送られる人は官人で、送る人は明石の遊行婦でもあろうか。



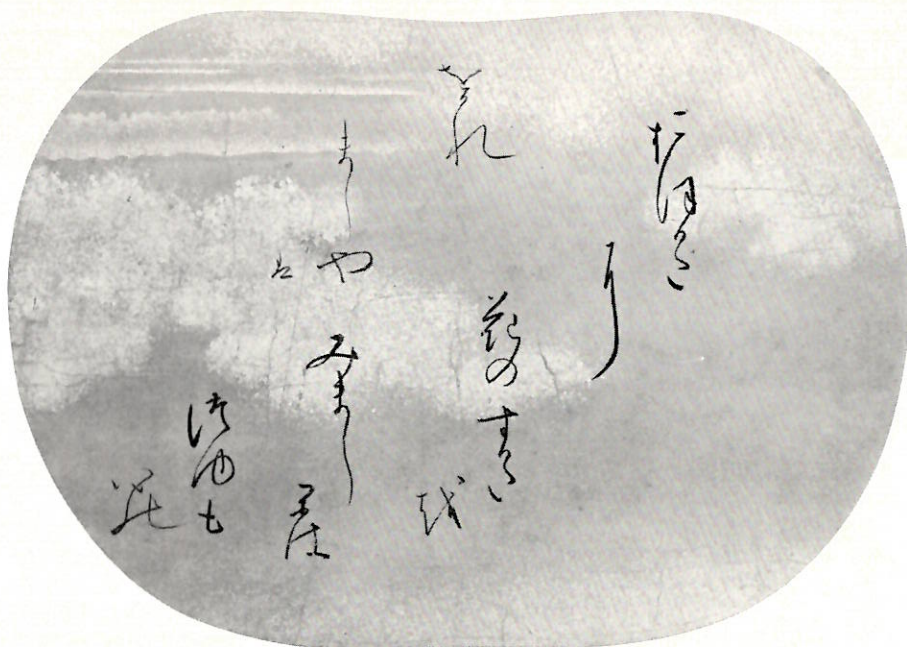
書 170 和歌色紙「此たひは云々」

酒井忠博氏蔵



書 171 和歌色紙「いく久し云々」

柳沢文庫蔵



書 174 和歌「おほかたに云々」 徳川恒孝氏蔵

書170 このたびはぬさもとりあへす手向山
もみちのにしき神のまにまに

『古今集卷九・羈旅』にある菅原道真の歌である。「朱雀院（宇多上皇）の奈良におはしましける時に、手向山にてよみける菅原朝臣」と詞書がある。百人一首にも採られている。

「ぬさ」は神を祈る時の幣帛で、旅行者が旅の安全を祈るために、道祖神に供えるもの。「手向山」は京から奈良への峠である。

今度のこの旅行は、幣帛を取る余裕がありません。この手向山の錦の様な紅葉を神の御心のままに手向けといたします。どうぞお受け下さい—の意味。

書171 いく久し千代をかさねてもろともに
つきせぬ年をいはふよろこひ

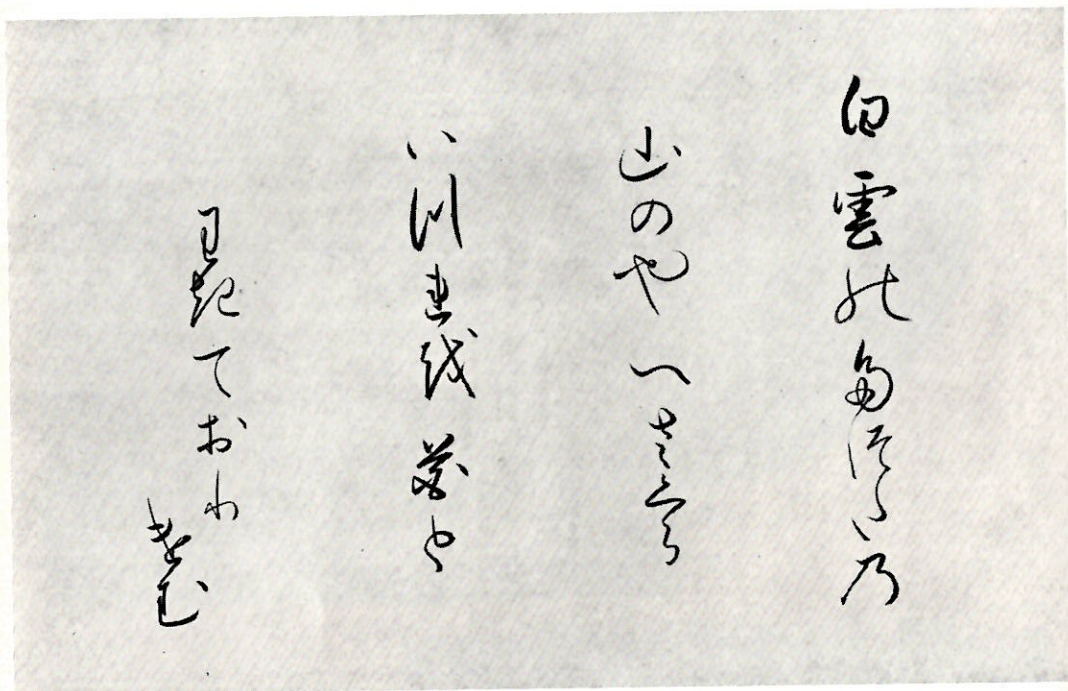
家綱の自作といわれているものであるが、言葉の羅列で一首としてのまとまりがなく、意味をなさない。ただめでたい言葉が並んでいるだけである。

長生きをして、更にお互いに尽きることのない年を祝いよろこぼう—という意味なのであろうか。

書174 おほかたに花のすかたをみましかは
つゆも心のをかれましやは

『源氏物語・花宴の巻』にある歌である。

もし、おおよそにでも花の姿を見ているのであったなら、いささかの心置きもなかりうものを—の意味。



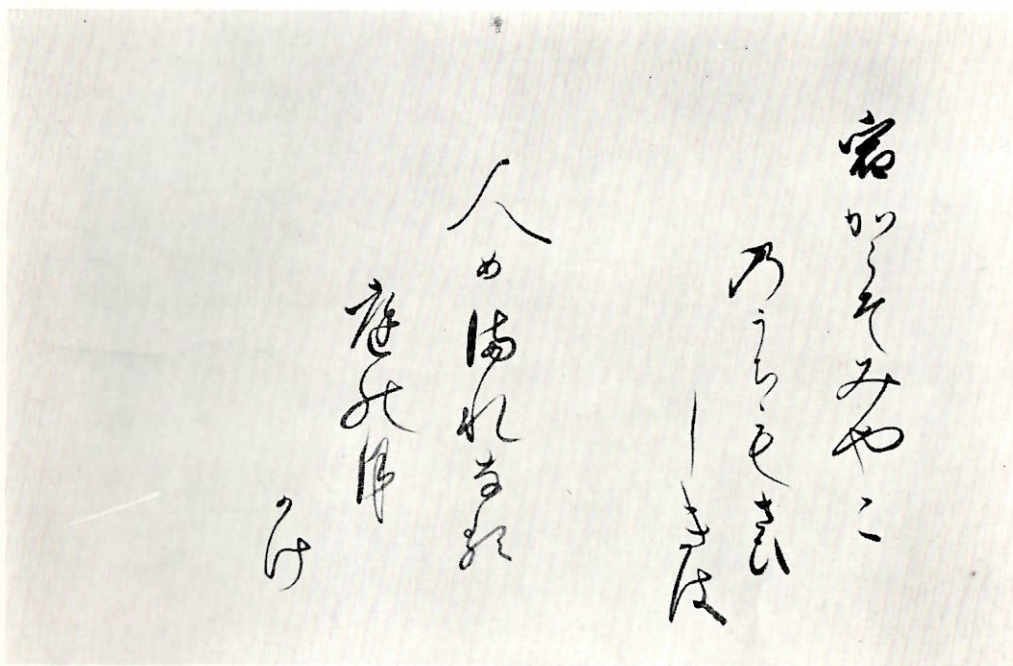
書 172 和歌懐紙「白雲の云々」 徳川恒孝氏蔵

書172 白雲のたつたの山の八へさくら
いつれを花とわきてをりけむ

家綱の自作といわれている歌である。

「白雲の」は白雲が湧き立つの意味で、立田山にかかる枕詞であると同時に、立田山の桜花を白雲に見たてているのであろうか。立田山は、普通は紅葉の名所として歌われていることが多いが、秋を春に替えて詠んでいるのは一寸かわっている。

白雲の立つ立田山の八重桜の、どれを花だと思わけて折り採ったのであろうか。白雲と満山の桜とさだめし区別しにくかったらうに一の意味であらうか。



書 173 和歌懷紙「宿からそ云々」 水府明德会蔵

書173 宿からそみやこのうちもさひしきは
人めまれなる庭の月かけ

『拾遺愚草・下』にある藤原定家の歌で、「文治三年冬侍従公仲よませ侍りし冬の十首」の中
の第二首目である。

華やかなる笥の都の中ながら、寂しさを感じるのは、人の訪れもかれはてた庭に月影がわび
しく照っているだけの我が宿であるからだ—の意味。



書 175 和歌「人のおやの云々」 徳川恒孝氏蔵

書175 人のおやの心はやミにあらねとも
子を思ふミちにまとひぬるかな

『後撰集卷十五・雑一』にある藤原兼輔の歌で、「太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとどめてまらうどあるじ酒あまたたびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに」という長い詞書がある。『兼輔集』には、「子のかなしきことを集りて言ひければ」とある。有名な歌で、『古今六帖』・『大和物語』・『源氏物語』・『狭衣物語』・『増鏡』・『十六夜日記』・『平家物語』・『曾我物語』などにも収められている。

親心というものは、判断力を持たないわけではないが、わが子のこととなると、闇夜に道を迷うように理性もなくなってしまうことだ—の意味。

人間の落ち入りやすい弱点を歎いている歌である。



書 176 和歌「あききぬと云々」 柳沢文庫蔵

書176 あききぬとめにはさやかにみえねども
かせのをとにそおとろかれぬる

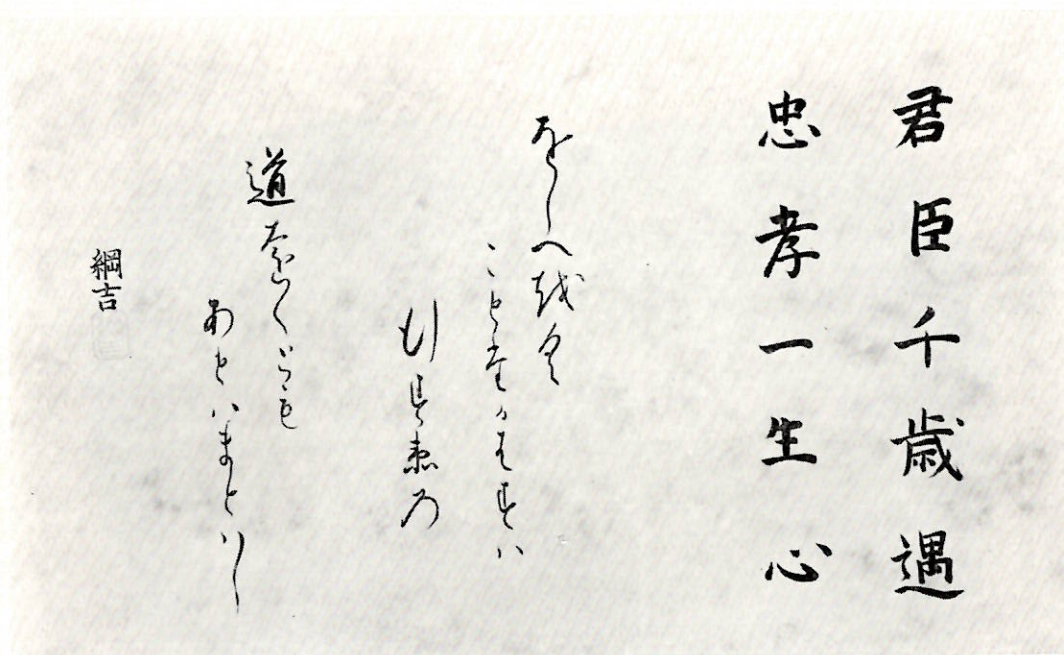
『古今集卷四・秋上』にある藤原敏行の歌で、「秋立っ日よめる」と詞書があり、『古今六帖』・『菅家万葉』・『新撰和歌』・『和漢朗詠集』・『敏行集』などにも所収されている。

秋が立ったといって、目にははっきりとした変化は見えないが、耳に聞く風の音は、荒く秋が来たと気づくことだーの意味。

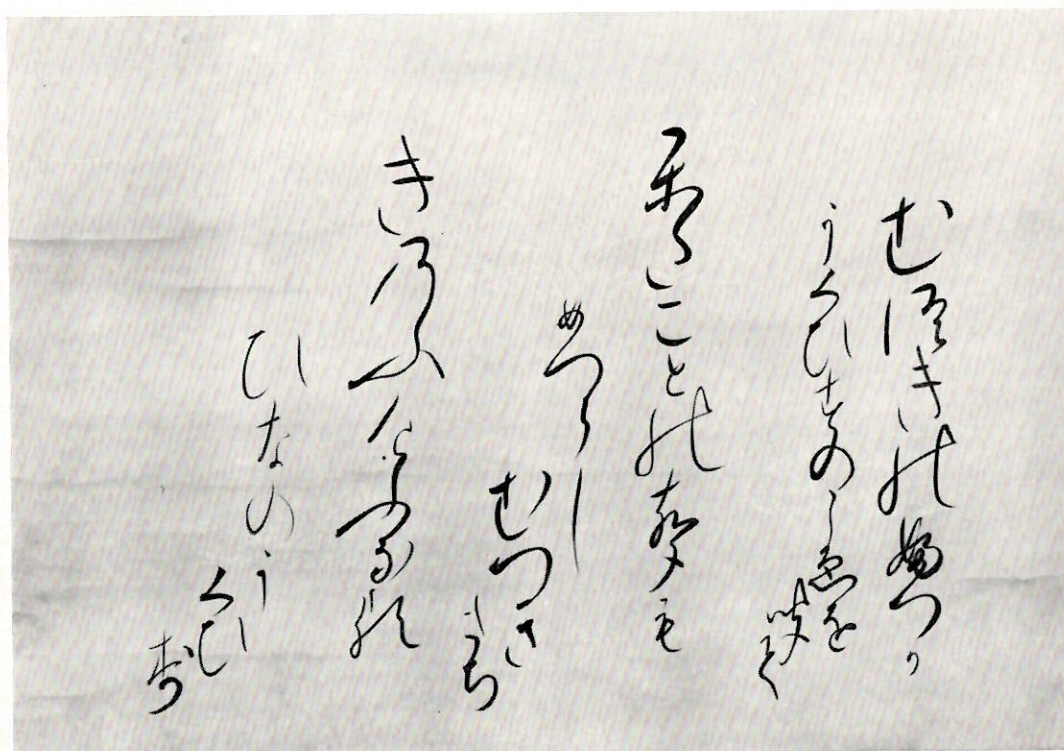
目と耳と対照の知的な技法が、当時の歌の新しさだったのである。

以上が家綱のものであるが、家綱の採っている古歌は有名で、人口に膾炙しているものばかりである。常識的な感はあるが、好みが無難である。

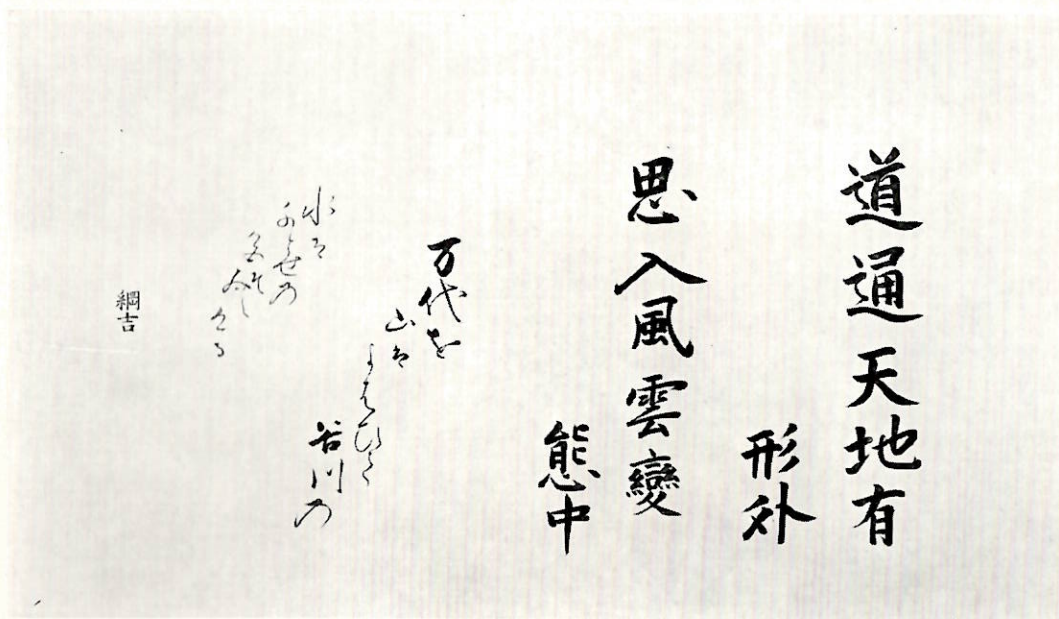
五代將軍綱吉



書 195 詩歌 徳川恒孝氏蔵



書 198 和歌色紙「かたことの云々」 徳川恒孝氏蔵



書 196 詩歌 徳川黎明会蔵

書195 をしへおくことたかはすハ行す糸の
道遠くともあとハまとハし

『後撰集卷二十・賀歌哀傷』にある村上天皇の歌で、「今上帥のみこ（親王）と聞えし時太政大臣の家にわたりおはしまして帰らせたまふ御おくりものに御本奉るとて」と詞書がある。太政大臣貞信公（藤原忠平）の歌、「君がためいはふ心の深ければ聖の御代のあとならへとぞ」の御かへし歌としての、村上天皇の御製である。

教えておくことに誤りがないならば、前途はたとえ遠くても、踏み迷うことはあるまい。正しい教えと、それを守っての実行とで、未来は明るく開けるであろう—の意味。

書198 むつきのふつかうくひすのこ糸を聞て
かたことの声もめつらしむつきたち
きのふけふなるひなのうくひす

綱吉の自作の歌である。「正月の二日うぐいすの初音を聞いて」詠んだ歌である。

まだ幼い、たどたどしい鳴声であるが、愛らしく珍しくも感じられることである。正月が来て、昨日今日鳴き初めた雛の鶯の声よ—の意味。

新春にふさわしい、雛鶯の初音をよろこんでいる様子がよく判る。歌も幼いが素直な出来で、綱吉の人柄がうかがえる。

書196 万代を山はよはひて谷川の
水は千とせの色そみえける

綱吉の自作の歌である。

山は万代の寿を呼びつづけており、谷川の水には千年の栄えの色の見えることである。山も川も御代の栄えをことはいでいる様に思われる—の意味であろうか。



書197 あつさ弓いそちの春をいはふより

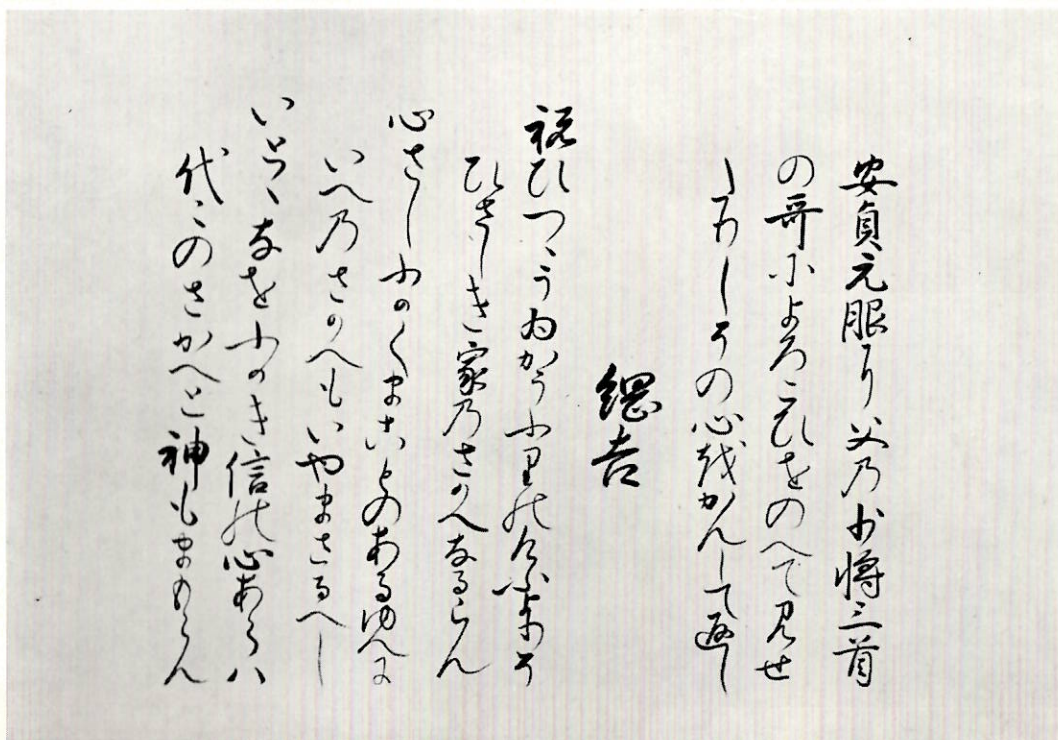
いく千世までもなほやつかへん

綱吉の自作の歌である。「あつさ弓」は「五十路」にかかる枕詞である。

五十才の春のめでたさを祝うよりは、さらに幾千代までもつつがなくて仕えつとめることをこそ期すべきである一の意味。

書
197 和歌短冊「あつさ弓云々」

柳沢文庫蔵



書 199 和歌懐紙「祝ひつつ云々」 柳沢文庫蔵

書199 安貞元服に父の少将三首の歌によろこひをのへて
見せたりしその心をかんに返し

祝ひつつうひかうふりのけふよりぞ
ひさしき家のさかへなるらん

柳沢吉保が息子安貞の元服に当って、三首の歌によろこびの心を見せたのに感心して、綱吉が詠んで返した歌である。

祝いながら安貞元服の加冠の儀を行う今日から、いよいよ柳沢家の久しい栄えの基礎が定まることであろう—の意味。

心さしふかくまことのあるゆへに
いへのさかへもいやまさるへく

志が深く、誠実さに徹しているために、柳沢家にはいよいよ栄光が加わることであり—の意味。

いととなをふかき信の心あらハ
代々のさかへと神もまもらん

より一層、深い信の心を堅持するならば、柳沢家代々の栄を、神もまもりたまうであろう—の意味。「さかへ」、「ゆへ」、「なを」、は「さかえ」「ゆゑ」「なほ」である。



絵 78 住吉行行図及和歌 徳川黎明会蔵

絵78 我見てもひさしくなりぬ住吉の
 きしのひめ松いく世へぬらん
 先にあげた家康の歌（書78）と同じものである。

以上が綱吉の歌である。偶然のことかも知れないが、綱吉の歌は極めて教訓的であり、將軍としての人柄が出ているようである。また、自詠の歌もまづまづといったものである。

六代將軍家宣

書208 山里の春の夕くれきてみれば
 入相のかねに花そ散ける

『新古今集卷二・春下』にある能因法師の歌で、「山里にまかりてよみ侍りける」と詞書がある。『能因法師集』には初句が「山寺の」となっている。

山里の春の夕ぐれを来て見ると、夕ぐれの鐘の音とともに、さくら花が散っていることよ一の意味。

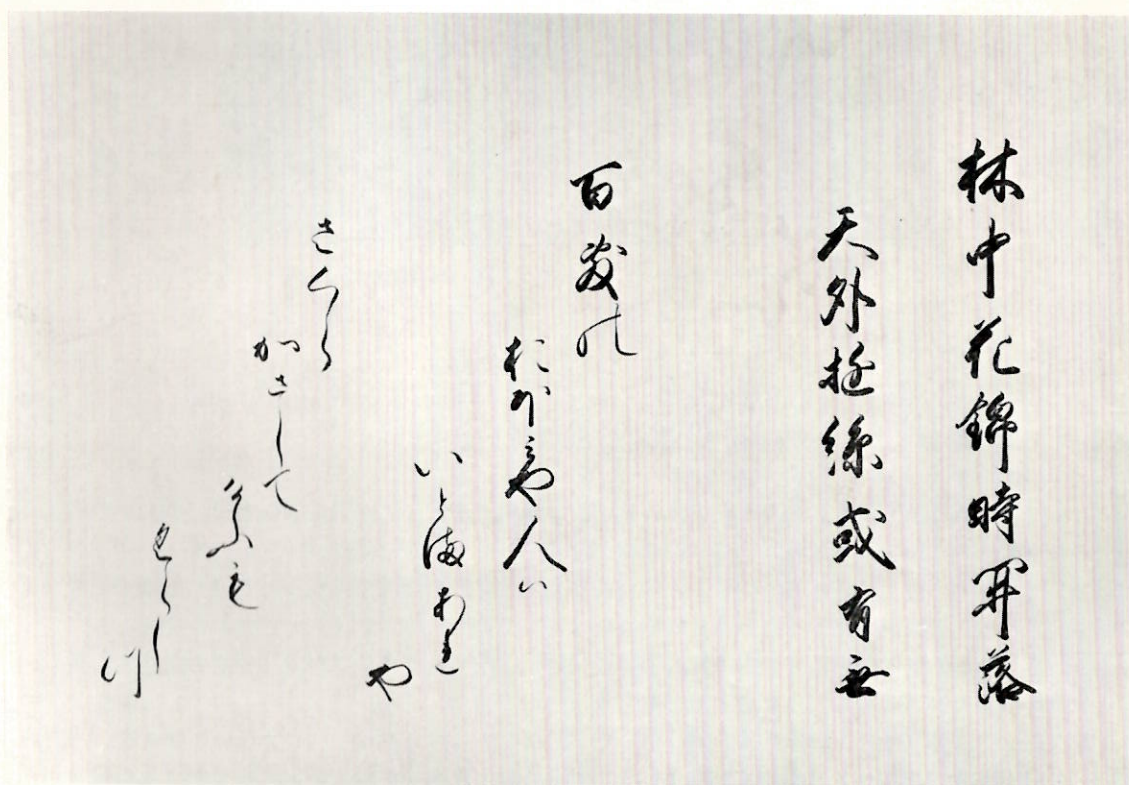
書211 ^{もしき}百敷のおおみや人はいとまあれやさくらかさし
 てけふもくらしつ

『新古今集卷二・春下』にある山部赤人の歌で、「題しらず」とある。この歌の原形は、『万葉集・卷十』に読人知らずとして「もしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここにつどへる」とある。『和漢朗詠集』に「春興」の題で、赤人の歌となっており、『古今六帖』にも見えている。「もしきの」は大宮人にかかる枕詞である。

もしきの大宮へ奉仕する人々は、暇があるのであろうか、桜の枝をかざして今日もまた終日を遊んで過している一の意味。



書 208 和歌「山里の云々」 徳川恒孝氏蔵



書 211 詩歌懷紙 久能山東照宮博物館蔵



書 206 和歌色紙「春くれハ云々」 久能山東照宮博物館蔵

書206 春くれハ宿に先さく梅のはな君か千とせ
のかさしとそ見る

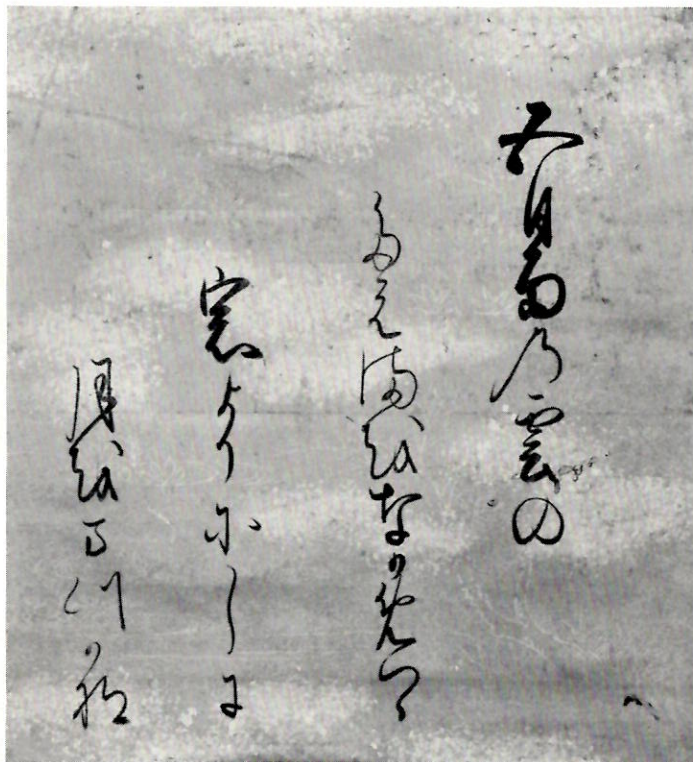
『古今集巻七・賀歌』にある紀貫之の歌で、「本康のみこ（仁明天皇第五皇子）の七十の賀のうしろの屏風によみて書きける」の詞書がある。

「うしろの屏風」とは賀の時、主人の背後に立てる屏風のことである。「かざし」は祝宴などの時、冠の巾子にさすために折る枝のことである。

春すなわち新年が来ると、家の庭に最初に咲く梅の花よ、君がこれから千年にわたって、新春の賀宴のかざしの花として見ることであるよ一の意味。

以上が家宣のものであるが、家宣はここで見るかぎりにおいては、平凡だが無難な歌を探っている。また、すべて春の歌であることにも興味が引かれる。

八代將軍吉宗



書 217 和歌色紙「五月雨の云々」 徳川恒孝氏蔵

書 五月雨の雲のたえまをなかめつつ窓より
にしに月をまつかな

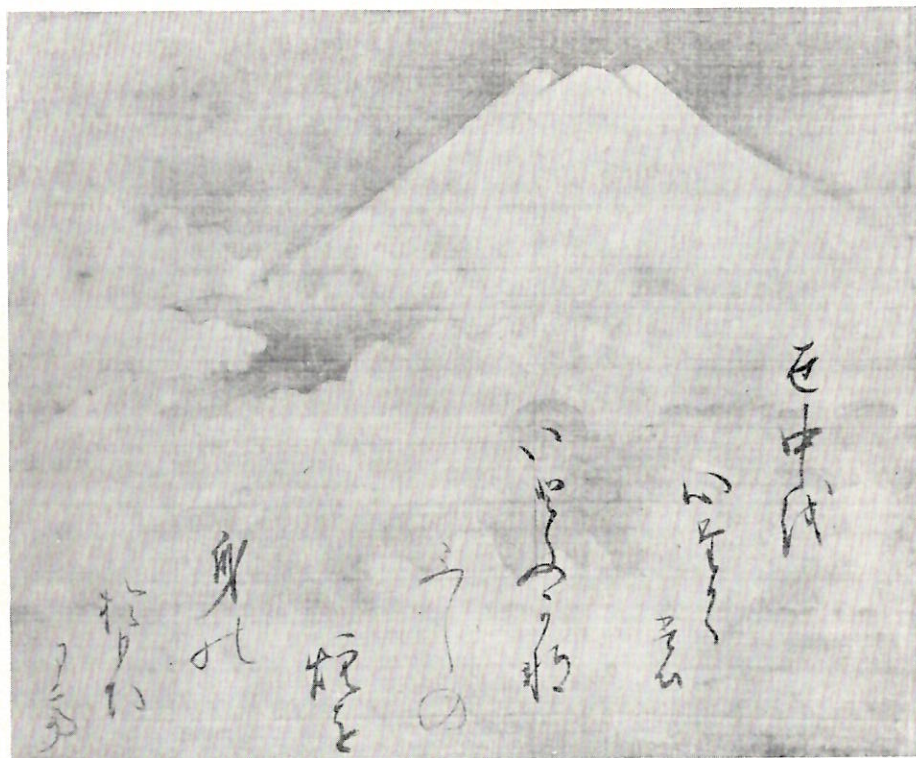
『新古今集卷三・夏』にある荒木田氏良の歌で、「五月雨のころを」と題がある。

五月雨の空の、雲の切れ目をながめつづけて、窓から西の空に、月を待っていることよ一の意味。

五月雨の降りつづいているころ、たまたま、夜、雲の切れ目が現われたのが楽しく、まだ雲のかかっている西の方の空に月が現われはしないかと、ひたすら待っている心である。

吉宗の歌はこの一首だけであるので、傾向をつかむことが出来にくい。

十二代將軍家慶



絵 115 富士図 前田育徳会蔵

絵115 世中を心たかくもいとふかな
ふしの煙を身のおもひにて

『新古今集卷十七・雑中』にある前大僧正慈円の歌で、「題しらず」とあるが、文治年間，早卒露胆百首と題し，二日間に百首を詠んだ中のもので，題は「山」とある。

世の中を心高くも厭っていることであるよ。高く立つ富士の煙を，わが身中の思いの火の現われとして一の意味。富士の煙はすなわち，わが思いなのである。

家慶もこの一首のみである。

十五代將軍慶喜

書278 わするなよ都の空を立つ雁もなれし雲井の花
の色香を

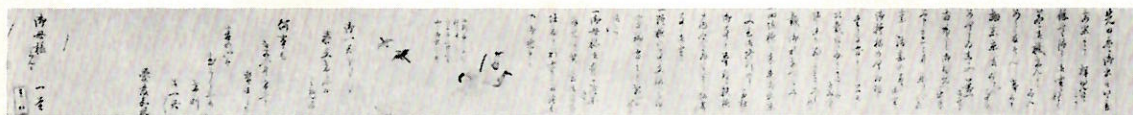
慶喜の自詠の歌といわれているもので，帰藩する誰かを雁に見たてて，与えた一首であろうと思われる。

都の空をたって北に帰る雁よ。住み慣れた都の大空の花の色香（都会の美しさ華かさ）を忘れるなよ一の意味。



書
278
和歌「わするなよ云々」

松平永芳氏蔵



書 248 書状（母宛） 水府明徳会蔵

書248 何事もきのふにけふと替れとも

春の心はむかしなりけり

慶喜の自詠の歌で、母に宛てた書状の中に記されている。昨日・今日・昔と縁語を使っている。何事も昨日今日と刻々に変化する世の中であるけれども、春の様なのかなわが心は、昔のままに時流に動かされることはないのである一の意味。

慶喜の歌は、自詠の二首から見たかぎりでは、何か鷹揚な人柄が感じられる。

以上歴代将軍の染筆になる歌をならべたのであるが、古歌以外の自作と思われる歌は皆極めて難解である。誤字が多く、仮名づかいや、文法的にも正しくないものがみられる。ただ歌らしい言葉を羅列しただけのものが多く、したがって、勝手に想像して意味をとってみたまでである。

古歌に関しては、各将軍がどのような古歌を選んで染筆したかということに興味をわき、その将軍の人柄も想像出来るが、記憶ちがいや書き誤りもある様だし或は故意に原文をかえたものもあろう。今は、正確な原典の方に従って略解をしておいた。

博物館のあゆみ

館内業務

1. 特別展

○漆と染織を中心とする徳川将軍の秘宝展

会期＝昭和46年1月1日～4月12日

徳川歴代将軍の所用した染織品・漆工芸品の優品を中心とした展示。

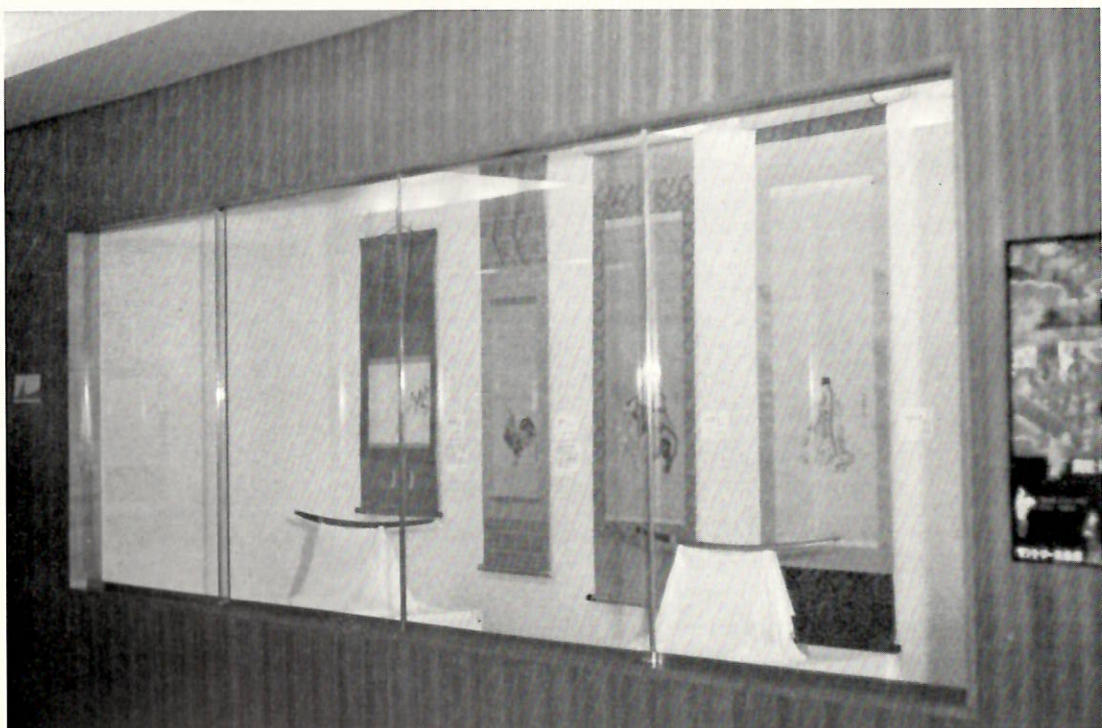
○徳川将軍の書画展《開館七周年記念特別展》

会期＝10月16日～11月20日

徳川歴代将軍の自筆書画約150点を、財団法人徳川黎明会、水府明徳会をはじめとする全国の所蔵者各位の御協力のもとに開催。



書画展風景



書画展風景



書画展風景



書画展風景

○徳川将軍の甲冑と刀剣展

会期＝昭和47年 1 月 1 日～3 月31日

徳川将軍の所用した甲冑・刀剣の優品を展示。

2. 平常展

○昭和46年 4 月13日～6 月30日 第一期平常展

○ 7 月 1 日～10月15日 第二期平常展

○ 11月21日～12月31日 第三期平常展

3. 友の会活動

4 月 「戦国武将展」(会場・田中屋百貨店)を見学。

5 月 座談会「戦国武将展を見て」を行なう。

6 月 「原始人展」(会場・田中屋百貨店)を見学。

講演会「日本人の起源」(講師・国学院大学教授樋口清之氏)へ参加。

8 月 第6回文化財入門講座に参加。

10月 特別展「徳川将軍の書画展」を見学。

11月 講演会「徳川家康の人間像」(講師・国学院大学教授桑田忠親氏)へ参加。

1 月 新春お茶会へ参加。

4. 文化財入門講座(第6回)

・期日＝昭和46年 8 月29日

・講題「日本刀入門～鑑賞と取扱い方～」

・講師・佐野美術館学芸員渡辺妙子氏

・文化財映画「伝統工芸～わざと人～」 「静岡県新風土記」もあわせて上映する。



5. 講演会

○「日本人の起源」

講師・国学院大学教授樋口清之氏

期日＝昭和46年 6 月 5 日

会場・第一生命ビル 8 階大ホール

主催・久能山東照宮博物館

○「徳川家康の人間像」

講師・国学院大学教授桑田忠親氏

期日＝昭和46年11月14日

会場・久能山東照宮博物館一階ホール

6. 図録の発刊について

○資料集 1.「徳川十五代甲冑と刀剣」を4月17日に発刊する。

○資料集 2.「徳川歴代将軍の書画」を10月16日に発刊する。

7. 博物館資料の寄贈について

昭和46年6月12日 静岡県文化財専門委員長加藤忠雄氏より、榊原照成の書蹟一幅が寄贈された。

8. 刀剣類定期手入れについて

昭和46年5月8日 掛川市の刀剣研磨師池田猪太郎氏他一名にて行なわれた。

館外業務

1. 特別展

○「戦国武将展」

会期・3月31日～4月11日

会場・静岡市呉服町・田中屋百貨店

主催・久能山東照宮博物館・静岡県文化財保存協会

信長・秀吉・家康を中心とする武将の遺品を展示。

○「原始人展」

会期・6月9日～6月14日

会場・静岡市呉服町・田中屋百貨店

主催・久能山東照宮博物館・静岡放送・静岡新聞

旧石器時代～弥生時代までの考古学・人類学資料約100点を展示。

2. 巡回展

○「徳川十五代甲冑と刀剣展」

会期・4月29日～8月31日

会場・日光東照宮宝物館

主催・日光東照宮

重要文化財伊予札黒糸素懸威胴丸他70点を出品。

○「徳川歴代将軍の甲冑と刀剣展」

会期・昭和47年1月2日～1月16日

会場・大分市トキハ文化ホール

主催・大分合同新聞社

徳川家康画像・刀伝光世作（写）他40点を出品。

3. 資料の出品について

○「郷土の名刀展」

会期・昭和47年1月12日～16日

会場・浜松市松菱百貨店

重文 脇指 無銘行光作他12点を出品。

○「江戸元禄 武人と町人展」

会期・昭和47年1月2日～9日

会場・いわき市大黒屋百貨店

太刀 銘山城国住藤原信吉、腰弁当箱を出品。

4. 静岡県文化財保存協会総会について

期日・昭和46年6月13日

会場・久能山東照宮博物館一階ホール

昭和46年度総会が開催され、松浦副館長が出席。

小林学芸員が昭和45年度事業協力者として表彰された。

5. 静岡県博物館協会総会について

期日・昭和46年6月25日

会場・三島市楽寿園

昭和46年度総会が開催され、白井館長・森主任・鳥光書記が出席。

6. 東海地区博物館連絡協議会について

期日・昭和46年7月1日～2日

会場・東海大学海洋科学博物館

昭和46年度総会が開催され、松浦副館長・森主任・鳥光書記が出席、白井館長が会長に選出される。

7. 全国博物館大会について

期日・昭和46年10月24日～27日

会場・神奈川県横須賀市立博物館

第19回大会が開催され、松浦副館長・森主任が出席。

庶務報告

1. 昭和46年度入館者状況

月	区分	大人	小人	団体	計
4月		9,142	1,322	916	11,380
5月		10,795	1,243	1,863	13,901
6月		5,571	213	540	6,324
7月		4,504	438	385	5,327
8月		8,545	2,483	290	11,318
9月		5,067	277	650	5,994
10月		7,163	338	1,209	8,710
11月		6,623	516	1,111	8,250
12月		3,088	162	99	3,349
1月		11,240	1,583	169	12,992
2月		7,396	383	117	7,896
3月		11,952	1,701	608	14,270
計		91,086	10,668	7,957	109,711

2. その他

○駿府博物館書記渡辺真弓さんが4月17～28日、5月4～15日まで博物館実習のため来館。

○鳥光陽子書記 6月30日付にて退職。

○山田礼子、昭和47年1月1日付にて書記として採用。

久能山東照宮博物館報

—— 第 5 号 ——

昭和 48 年 8 月 25 日 発行

編集発行 久能山東照宮博物館

〒420 静岡市根古屋 390

TEL 0542 (37) 2 4 3 7